心の中の”こころ”

ｃａｄｅｔ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心の中の”こころ”

【Ｎコード】
Ｎ７４０８Ｙ

【作者名】
ｃａｄｅｔ

【あらすじ】
夢、希望、野望、さまざまな思いを抱いた若者が集うソルミナティ学園。ここに恋人の夢を支えたくて入学した一人の少年がいた。
しかし、思いしかなかった少年の実力は伸びず、周囲からは笑われ、友人もいなくなり、恋人も彼のそばから離れ、彼の歩みは止まった。
だが、彼は一人の老婆と出会い、その出会いが少年を徐々に変えていくきっかけとなる。
これは心の歩みを止めた少年の物語です。

第1章第1節（前書き）

はじめまして、ｃａｄｅｔといいます。
この小説は、私が脳内で描いていたものを衝動的に投稿してしまったものです。
小説を書くのも初めてで素人丸出しの文ですが、どうかよろしくお願いします

第1章第1節

第1章

ソルミナティ学園、夢、希望、野望などを抱いた大陸中の若者が集う場所。
完全な実力主義で、一定の成績に満たない者は容赦なく落とされる場所。
この場所にきて2年目、この俺、ノゾム・バウンティスは昼休みの間、日の当たる屋上でこれまでのことを思い返していた。

俺がこの学園に来たのは2年前、2人の幼馴染とともに故郷の村を出て、この場所にきた。
1人はケン・ノーティス。
子供のころからの無二の親友。

もう一人がリサ・ハウンズ。
赤みがかったポニーテールを持つ美少女。
俺の恋人で一番大切な人。
彼女は昔から勝ち気な性格で村のガキ大将と喧嘩をしては一方的にボコボコにするほどの悪ガキだった。
そんな彼女との出会いは俺8歳の時、村の近くの河原で魚釣りをしているときだった。

「あ、あんた、今暇？」

そんな一言を彼女が掛けてきたのが切っ掛けだった。
赤みがかったショートカットと勝ち気な表情、徐々に熱を帯びて

いく自分の顔・・・・一目惚れだった。

彼女の両親は今まであちこちの土地を転々としながら生活していたが、彼女の父親が旅の途中で亡くなったことで、故郷であるこの村に定住することを決めたそうだ。

彼女は子供のころ、よくいたずらをして怒られていたが、本当に嫌がられることはせず、むしろそんな輩は絶対に許さない人だった。

そんな彼女に一番ボコられたのは村のガキ大将となぜか俺だったが。

彼女に俺が告白したのが3年前、彼女への想いを抑えきれず、彼女に自分の想いをぶつけた。

一目惚れであること、ずっと好きであったこと。

そんな自分の告白に彼女は、

「ま、まあいいわよ、付き会っても。」

と、何事もないかのように振舞っていたが、顔は赤くなり、声も震えていて、すごく喜んでくれていた。

彼女と俺が正式に付き合うようになってしばらくすると彼女は俺に自分の夢を語ってくれた。

「父さんと同じようにいろんな世界を見てみたい。」

俺は彼女が亡くなった父親のことを母親から聞いて、外の世界にあこがれていたことは知っていた。

俺は、

「じゃあ、俺はリサの背中を守るよ。」

と俺は彼女の背中を支えることを固く誓った。

彼女はそんな俺に、「おりがとう！」と大喜びして抱きついてきた。

まどろみの中、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴る。
俺は体を起こし、固まった体をほぐすと午後の授業を受けるため教室に向かった。
もうその誓いが果たせないことを無理やり頭の中から切り捨てて。

俺のクラスは2学年１０階級、2学年の最下位クラスだ。
その中でも俺は最底辺、いわゆる落ちこぼれの中の落ちこぼれ。
クラスに入ると周囲からの侮蔑と嘲笑が俺を出迎える。
「また来たよ。最底辺。」「いい加減消えればいいのに。」「さっさと退学してくれないかな～。」

それらの心無い声に心が痛むが無視して自分の席に座る。
俺が席につくと3人の男子生徒が俺の席の周りに集まった。

「よう最底辺、また意味もなく授業を受けにきたのかよ。」
真ん中の大柄な男、マルスがこちらを威圧するように話かける。
「いい加減無駄なことだと諦めれば良いのに。」「お前のせいでこっちまでお前と同レベルに見られるんだからいい迷惑だぜ。」
大柄な男の脇にいた取り巻きの2人も続いて罵る。
「まあ、幼馴染の紅髪姫にすら見捨てられたんだ、いい加減夢見る

のはやめたほうがいいんじゃねーか。」
３人の嘲りに同調して周囲も笑い始める。
担任の教師が教室に入るまで、３人は俺を罵ることをやめなかった。

そう、俺は１学年の夏にリサに振られた。
彼女は一方的に別れを告げるとすぐさま背を向けて立ち去った。
俺は彼女に何度も訳をたずねた。しかし、彼女はまるで汚物を見るような眼で俺の話を聞こうともしなかった。
周りでは俺が浮気をしたのが原因となっていた。
リサはその容姿と実力から“紅髪姫”と呼ばれるほどの女性。
一方の俺の容姿は普通で、成績も振るわない。
そんな彼女と付き合っていた俺はやっかみの対象だったが、俺が彼女に振られたことが一気に周囲からの俺の評価を下げた。
友人は一人残らずいなくなり俺を嘲笑う側に回った。
それでも学園でまじめに授業は受けたし、自主鍛錬も怠らなかった。
誓いを守り続ければいつか・・・・・そんな思いが俺にはあった。

そんな中、幼いころからの親友と彼女が付き合いだしたとことを知った。
愛しい彼女の隣を歩く親友と楽しそうに微笑む彼女。
実習では息の合ったコンビネーションを発揮し、他ペアを圧倒する様子を見て俺は彼女の隣に居場所が無いことを無理やりにでも理解されられた。

午後　２時間目

ノゾム　ｓｉｄｅ

「ふっ！」

学園の自動人形が勢いよく振り下ろした模擬剣の側面を摸造刀で打ち落とす。

打ち落とした模造刀を返し、人形の首筋に売り込むと人形内の術式が作動して、自動人形を停止させる。

教室で座学が終わると今度は訓練場での実習となった。

この学園には、訓練場のほかに魔法実験場等の施設も複数あり、それぞれの施設では生徒たちが自分の能力を研鑽していた。

訓練場は複数のエリアに分かれており、同じ授業を複数の階級がこなせる様になっている。

今日は主に対人戦の訓練の様で、それぞれが模擬剣などで自動人形と打ち合っていた。この人形は魔法の陣術の一つで人形内の陣に魔力を込めることで自律戦闘を行う人形である。

ただ、１０階級に支給される自動人形は質があまり良くなく、ある程度決まった動きしかしないので、主に準備運動に使かわれている。

「は～い。次はそれぞれペアになっての模擬戦よ。組み合わせはこちらで決めるわね～。」

１０階級担任のアイリ・ヴァール先生が声をかけると自動人形が停止したので、みんな手を止め、組み合わせが決まるのを待つ。

アイリ先生は長いウェーブがかった茶髪と優しそうな眼をしており顔立ちは間違いなく美女である。

ただこの先生、頭のねじが2、3本抜け落ちているような言動をしているので、この実力主義の学園には似つかわしくない人である。

学年最下位である１０階級の担任を任せられている（押しつけられているともいう）のも、この性格で１０階級を担当することの意

味を理解していないと周囲には思われている。
ただ本人の能力は相当なものであることはこの学園の教師をしていることから明らかである。

やがて組み合わせが決まり、それぞれがそれぞれの相手と模擬戦を開始する。

肝心の俺の相手は、
「よう、最底辺。あいにくだったな。」
先ほど俺を罵っていたマルスだった。

「さっさと始めようぜ、最底辺の相手なんて時間の無駄だからな。」
マルスはそういうと背中に背負った大剣を引き抜く。
マルスは粗暴な男だが実力はかなりのもので、１０階級にいるのは普段の言動と素行の悪さからである。
俺も腰にさしている摸造刀を抜く。
俺の武器は刀と呼ばれる東の島国の剣である。切ることに特化したその剣は、達人が振るえば鉄さえたやすく切り裂くという。
ただし、高い技量を必要とすることと、刀自体の希少さもあって、大陸には普及していない。
ある事情から力に頼ることができない自分にとっては一番適した武器である。

「それでは、はじめ～～～。」

アイリ先生の気の抜ける声とともに模擬戦が開始された。

「うおりゃあああああ」

大声とともにマルスが大剣を振り下ろす。

大振りの攻撃を俺は刀を沿わせる様にして受け流す。
甲高い音と共にマルスの大剣が逸れて地面にたたきつけられる。

「はっ！」
マルスの攻撃後の隙に間合いに踏み込み、首筋を狙って刀をなぎ払う。
「遅ぇよ！」
マルスは腕のガントレットで刀を防ぐ。摸造刀は刀本来の切れ味を発揮せず、ガントレットにはじかれる。
マルスはそのままガントレットで顔に殴りかかってくるが、俺は頭を下げて避ける。
再び俺は切りかかろうとするがマルスは大剣を片手で強引に振りぬいてくる。
俺はやむ追えず後退し、仕切り直しとなる。
大剣でたたきつぶしにかかるマルスと、大剣の間合いの内側に入ろうとする俺との間でしばらく一進一退の攻防が繰り広げられるが、
「いい加減つぶすか。」
マルスが一言そう呟くと彼の威圧感が膨れ上がった。

“気術”

大陸東部発祥の技術で、本人の生命力を隆起させさまざまな現象を顕現する技術。

マルスはこちらに一気に踏み込んでくる。その速度は今までとは比較にならない。
気術による身体強化の成果である。
一気に獲物を間合いに捕らえると大剣を振り下ろす。
俺も咄嗟に気術を使用し避ける。避けた大剣は轟音とともに土面を捲り上げた。

「ちっ！かわしのかよ。」
一撃で決められなかった事にいらついたのか、マルスが毒づく。
彼は地面にめり込んだ大剣を引き抜くとそのままこちらに再度切りかかってきた。

強力によって振り回される剣戟を気術による身体強化を使い捌く。
鉄と鉄とがぶつかる音が戦いの壮絶さを物語っているが、その内容は一方的だった。
マルスの身体強化は俺の身体強化をはるかに上回る効果を上げている。
対する俺の身体強化の効果は俺自身の特異性もあってスズメの涙程度。
マルスは素行こそ悪いが、その実力は間違いなく学年の中でも上位である。
逆に学年上位の実力を持っていても最下位階級に甘んじているマルスの素行の悪さもひどいが。

そのマルスの強化した剣技はいつものノゾムではさばききれない。
しかしこのスズメの涙程度の身体強化がそれを可能にしていた。
強力によって振り下ろされる剣戟をさばき切れる最低限度の身体能力を授けてくれている。

「いいかげんつぶれやがれ！！」
すぐにつぶせると思った俺の予想外の抵抗にマルスのいらだちはさらに募る。マルスはさらに気力を高めて襲いかかる。
「グ、簡単につぶされてたまるか！」
俺は相手のペースに巻き込まれないよう必死に食らいつく。
斬撃の威力は上がったが、マルスの攻撃は単調になり、その単調さゆえさばききることは不可能ではなった。

しかし、あくまでさばき切れるだけであり、反撃する余裕は俺にはなかった。そして反撃できなければ、結果分かり切っている。
やがて限界が訪れた。
マルスの一撃を捌ききれず体制が崩れる。
崩れた体制を立て直す暇もなく、返す刃が俺を襲う。
「くたばれ！」
大きく体制の崩れた俺はとっさに刀をマルスの大剣と自分の体に入れるが、相手の強化された斬撃を止めることは出来ず、そのまま吹き飛ばされて訓練場の壁にたたきつけられた。
「ちっ、ウジ虫が無駄な抵抗しやがって。」
そんなマルスの言葉を聞きながら俺は意識を失った。

ノゾム　side　out

「痛ッ！」
ぼんやりとした意識が背中の痛みで覚醒する。気がつくと彼は保健室のベットの上だった。
「おや、気が付いたかい？」
保健室の机では眼鏡をかけた白衣を着た女性が仕事をしていた。
彼女はノルン・アルテイナ、この学園の保険医で知的な美女という言葉がぴったりな女性だ。
彼女はこちらに来ると目の前で指を動かしたりして意識の状態を

確認している。
「よし、意識ははっきりしているな。どこかほかに痛みを感じる場所はあるか？」
彼は首を横に振ってこたえる。
特に異常はなさそうだ。
「分かった。もしどこか痛みを感じるようになったらいつでも来なさい。我慢して悪化したらなお悪いからね。」
彼女は、微笑みながら言う。その表情は知的な雰囲気とは違い、頼りがいのあるお姉さんといった感じで、はじめとはまた違う印象を覚えるだろう。
事実、彼女は決してクールなだけではなく面倒見の良い頼れる先生の一人で、実際男女問わず、学園でもかなりの人気がある。
そんなとき、間延びした声とともに保健室に入ってくる人影があった。
「ノルン～～～、ノゾム君の様子はどお～～～～。」
入ってきたのは担任のアイリ先生。
「アイリ。ここは学園だ。呼び名には先生をつけなさい。」
「え～～～、ここじゃなら誰もいないし、大丈夫よ～～～～。」
「彼がいるだろう、彼が。」
彼女たち二人はプライベートに置いても仲が良く、実は学生時代からの親友同士であるらしい。
ちなみに二人ともこのソルミナティ学園出身である。
「ノゾム君なら大丈夫だよ。それよりノゾム君体のほうは大丈夫～～～？」
アイリ先生が彼を心配そうに見つめてくる。
「だからけじめを・・・もういい。彼は大丈夫だ、かるい脳震盪くらいだよ。」
「はい。少し頭がクラクラしますが大丈夫です。」
「よかった～～～。心配したんだよ。ノゾム君にもしものことがあったら大変だもの。」

そう言って彼女は微笑んだ。
その様子は本当に安心した様子で、彼女が彼をどれだけ心配していたかが分かる。
「大丈夫だよ、アイリ。彼はこのくらいではリタイヤはしないよ。」
「もう、ノルンは冷たいよ。」
「ちゃんと彼の状態は把握した。心配するのはいいが行き過ぎてはだめだよ、アイリ、生徒を信頼して生徒自身の成長に任せることも必要だ。」
言い合いをする二人だが、アイリ先生はいつもと違って強い口調だし、ノルン先生はかなりくだけた感じで話している。
いつもとは違う調子で気兼ねなく話しているところを見ると、２人の信頼関係がうかがえる。

ノゾムはそんな様子を見ていると、もう放課後で日が暮れており、いつもの鍛練の時間が迫っているのが分かった。
あわてて荷物をまとめて帰り支度し先生たちに挨拶をする。
「ノルン先生、アイリ先生ありがとうございました！失礼します！」
彼ははじかれたように保健室を飛び出した。

ノルン　ｓｉｄｅ

あわてて保健室から飛び出して行った彼を見送ると、私は親友に声をかける。
「彼が噂の人物か。なるほど噂はあてにならないな。」
「でしょう～～～。」
親友がうれしそうに微笑む。

ノゾム・バウンティス。

２学年きっての落ちこぼれ。

噂では1学年の時、幼馴染で同学年でもトップクラスの実力を持つリサ。ハウンズの恋人だったが浮気がばれて振られたそうだ。
成績自体も高くなかったため、すぐさま嘲笑の的となった。
だが私自身、彼は決していい加減な人間ではないと分かった。
彼が運び込まれて時、体の状態を確認するために服を脱がしたが、その時柄もなく驚いた。
彼の体は鍛え上げられた筋肉に覆われていた、その身体には無駄がなく一種の完成形に近いと思った。
最も驚いたのはその身体は決して天性のものではないというものだった。
ちょうど彼の使う刀のように、気の遠くなるほど鍛練を行うことによって鍛え上げられた肉体。
欲に溺れている人間では無理だ。
いや、今の2学年にあれほどの肉体を作る鍛練を行う者はいない。
しかも彼の身体には無数の傷があり、それはもしかしたらベテランの冒険者にも匹敵していたかもしれない。
おそらく噂は彼の特異性やリサ・ハウンズの恋人だったなどが複雑に絡み合ったことが原因だろう。

彼の特異性。
それは彼が1年の時に発現した“アビリティ”だ。

アビリティ
種族を問わず発現する能力の総称で、発現すると本人はアビリティに応じて様々な恩恵を受けることができる。
その内容は魔法の適性向上や、身体能力の向上など多岐にわたり、その種類は無数にある。

ノゾム君のアビリティは“能力抑圧”。
発現すると本人の能力を抑圧し、一定以上成長しなくなる。

抑圧される能力は人によって変わるが彼の場合、力、魔力、気量と3つもの能力を抑圧されており、彼の大きなハンデとなっている。
発現することが極めてまれなアビリティではあるが、本人への恩恵は全くなく、むしろ足を引っ張るアビリティである。
アイテムや魔法、気術による強化は可能であるが、その効果は普通の人間にもたらす効果より明らかに劣る。
これにより彼の成績はさらに下がり、同学年で最下位となる。
これまで進級できたのは、筆記試験の結果を上乗せしているからである。
それでも進級の際、2回追試を受けている。

「アイリが彼を気にする理由がわかったよ。」
「でしょう～～～。みんなノゾム君のこと悪く言うけど、あれだけ頑張っているんだもの。私は報われてほしいわ～～～。」
アイリは普段はぽややんとしていて頼りないが、肝心な事には極めて鋭い観察眼を発揮する時がある。
彼については、普通の日常では悪い噂しか聞かない。
おそらく日々の生活の中で、噂の彼と現実の彼と間にわずかな違和感を感じ取ったのだろう。
なぜ彼がここまで食らいつけるのかはわからないが、そこまで努力しているのだ。
私には親友と同じように教師として、人間として彼を応援してやりたい気持ちが確かにわいていた。

ノルン　side　out

第1章第1節（後書き）

いかがだったでしょうか。初めての小説ということでいろいろ至らないところがあるかと思います。

ですが、私もこの場の小説が好きなので、私の小説で少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

いろいろ考えましたが、この小説を続けることにしました。

皆さんの意見、感想をお待ちしています。

登場人物紹介

ノゾム・バウンティス　（主人公）
地方の農民出身、能力値は魔力以外平均的。
恋人の夢を支えたくて学園に入学するが、成績は伸び悩み、さらにアビリティの能力抑圧により、さらに成績が伸び悩む。
入学半年後に突然恋人から別れを通告され、成績も最下位クラスまで落ち、生徒たちから嘲笑の対象となる。
使用武器は主に刀。
アビリティ
能力抑圧
本人の筋力、魔力、気を一定値以下まで落としてしまうアビリティ。
魔法、気術、アイテムなどによる強化は受けられるが、効果が著しく減退する。
ほとんど発現しないアビリティではあるが本人への恩恵は全くと言っていいほど
ない。
ランクＤ－

リサ・ハウンズ
主人公と同郷で元恋人、現在もう一人の幼馴染と恋人同士。
成績優秀、容姿端麗、勝ち気な性格であるが、根は純情でさみしがり屋。
世界中を見てみたいと思い、世界中の人が集まる学園に入学する。
主人公とは相思相愛の恋人同士だったが、１年の夏に突然別れを言い渡す。
現在はもう１人の幼馴染と恋人同志である。
成績はかなり良く、学園内の最上位の１階級である。

武器は片手剣と短刀の２刀流、炎、風の魔法にも適正がある。
ランクＡ

ケン・ノーティス
主人公のもう一人の幼馴染で現在のリサの恋人。
あらゆる方面に才を持ちを持つ。所属クラスは１階級。
顔だちもよく、性格もいいので告白してくる女生徒が絶えないが、あくまでリサ一筋。
ノゾムと普通に会話する数少ない学園関係者。
ランクＡ

アンリ・ヴァール
主人公のクラスである１０階級の担任。
茶色のウェーブがかったロングヘアーの美女。
性格は天然で基本的にほわほわしている。
だが、鋭いところがあり、意外なことで核心を突くことがある。
鈍そうな外見に似合わず、戦闘能力はかなりある・・・と思われる。

ノルン・アルテイナ
学園のお保健室の先生。
アンリとは学生時代からの親友同士。
切れ目のクールな美女で、一見冷たそうに見えるが実はかなり面倒見がいい。

シノ
主人公に刀術の手ほどきをおこなった老婆。
東の異国出身、戦闘能力は極めて高い（ランクＳ）。
この国に来たのは偶然で、理由は実家のお家騒動で追放されたから。

性格は齢のわりに子供っぽく（８０歳ほど）口より先に手（ランクＳ相当の技）が出る。

滅龍王ティアマット

龍の中でも異端中の異端。

本来は黒龍であったが、他の龍を食らい、その力を取り込み続けたため、その力は他の龍種が手を下せないほどになり、やむをえず大陸各地の地脈を利用し、封印されていた。

齢１万年以上を生きており、正確な年齢は把握されていない。

漆黒の体躯に黒の５色６翼の翼を持つ。翼の色は闇属性である黒が２枚、地水火風の属性に対応した色の羽がそれぞれ１枚ずつ

黒以外の羽はティアマットが殺して奪い取った他の龍の力の象徴で、彼の本来の翼は黒色。

光属性の白だけがない理由は今のところ不明。

取り込み続けた力に理性がほとんど飲まれている。

封印自体がティアマットの力で揺らぐことがあり、その揺らぎに巻き込まれたノゾムに偶然遭遇し、彼をおもちゃにして遊んでいたら、反撃され殺された。

登場人物紹介（後書き）

誤字や脱字を修正。
間違いが多くてすいません。

世界観説明

アークミル大陸

本小説の舞台となる大陸。

この大陸は定期的に北方の荒地に生息する強力な魔獣の侵攻に曝されいる。

本編開始の１０年前にこれまでをはるかに上回る侵攻があり（通称、大侵攻）、３つの国が崩壊している。

崩壊した国の領地は強力な魔獣の生息圏（通称、獄地と呼ばれている）。

この大陸には人間の他に獣人、妖精、エルフなど多種多様な人種が生活しており、大侵攻で崩壊した国には異種族の国もあった。

学園都市アルカザム

ソルミナティ学園設立のために作られた都市。ソルミナティ学園を中心に北に行政庁、東に市民街、南に商業区、西に職人区がある。

また、各所に冒険者ギルドもあり、学生たちもランクに応じた仕事を受けることができる。

都市間の交通の便はあまり考えられていない。これは各国勢力図の中立地点にこの年が作られたからである。

しかし、この都市は最新の研究機関も存在し、都市建造において多くの資金が導入されたので大陸にお　ける一大拠点であることは疑いようもなく、それゆえに多くの人と物資、経済が成り立った。

ソルミナティ学園

魔獣の大規模侵攻に対抗できる人材を育成するために大陸中の国が出資して作られた学園。

最高学年は４年生で、教育内容は戦闘だけでなく、研究、政治等

多方面に活躍できる人材を育成している。
生徒は能力に応じて1から10階級のクラスに分けられ、待遇も変わる。
1階級では訓練場や魔法の実験場を優先的に使用でき、場合によっては専門の先生からの個別指導も受けられる。
良くも悪くも実力主義の学園で一定の成績に満たない者の落第は当たり前で、退学も珍しくない。
また、各国の将来を担う人材を育成しているので、将来の国家間の勢力に影響を与えるので、政治的な駆け引きの場にもなっている。
主人公は能力抑圧のせいで実技の成績が良くないので筆記で成績をどうにか保っていた。

魔法
大気中の魔素または体内の魔素を自身の精神力と術式で隆起させ、さまざまな現象を顕現する技術。
基本的に詠唱術、陣術に分けられるが他にもさまざまな術式が存在する。

精霊魔法
世界の眷族たる精霊の魔法。
人間や亜人などが使う魔法違い、詠唱、陣など外界に干渉するためのプロセスを必要としない。

気術
本人の生命力を隆起させさまざまな現象を顕現する技術。
基本的に魔法と違い、詠唱、陣を必要としないものが多いが、魔法程大規模な現象を起こしにくい。
また気は生命力そのものなので気の完全な枯渇は死を意味する。

ランク
大陸で採用されている冒険者や軍人等の個人能力を段階的に評価

したもの。
ランクを上げるには魔獣を倒す、依頼や任務を完遂するなど、本人の行動によって評価される。

ランクE
最下位ランク、新米冒険者、新米兵士、学園では1年まではほとんどの人がこのランク。
ランクD
ランクとしては下位の冒険者や兵士、学園では2年生あたりが妥当なランク。
ランクC
ランクとしては中堅の冒険者や兵士、学園では3年生あたりのランク。
ランクB
上位の冒険者や騎士、学園では4年生に相当する。
ランクA
1流の冒険者や近衛騎士などだけでなく、政治、経済、軍事の中枢にかかわる人も相当するランク。
ランクS
超1流の人物に与えられるランク、現在大陸に十数人しかいない。
ランクSS
現在大陸には数人いるが、ほとんどの国にはこのランクを持つ人はいない。

龍
大陸内で最強の生物。
生物であるが実は精霊種の1種。
精霊と違い、物質的な肉体を持っているがその肉体は精霊の源であり、この世界の根源物質である源素の塊。
ただ肉体を持つのでその生態は生物に近い。

自らが死ぬと自分の子孫または自分を殺した対象に自分の力を継承させる。

龍殺し

龍を殺し、その力を継承した者のこと。

歴史上数人しか存在せず、その力は絶大、また異能に目覚める者もいる。

この数百年出現していない。

竜

魔獣の1種。

魔獣の中でも群を抜いた戦闘能力を持っているが龍には遠く及ばず、龍にとっては大したことはない。　だが、人間には脅威そのものであり、恐怖の具現である。

源素

この世界の根幹の要素、この源素が寄り集まり、精神的なエネルギーに変化したものが魔素又は魔力であり、生命力のエネルギーに変化したものが気である

第1章第2節（前書き）

第1章第2節です。今回は主人公の師匠が登場します。
それではどうぞ。

第1章第2節

学園都市アルカザム、ソルミナティ学園が作られた都市であり、学問の街として大陸でも有名であ　る。
都市の中心部にソルミナティ学園があり、その周囲をクモの巣状に道が作られている。
都市の北部には都市の政治を司る行政庁をはじめとした政治機関と、その政治機関をまとめている各国貴族などの富裕層が生活している。
東は市民街で、生徒たちの寮や、一般市民が多く生活し、南は商業区で各国から集まった商品や物品が集まり、この都市の経済の中心となっている。
また、冒険者ギルドもあり、学生もランクによっては仕事を受けることができる。
西は多くの職人が集まる職人区で鍛冶屋や医者、裁縫など各国の技術を生かした職人たちが日々しのぎを削っている。
都市の外は東西南北に道が走り、道以外は鬱蒼とした森が広がり、人の進入を阻んでいる。
この森には様々な魔獣が現れ、一般人でも勝てるような魔獣から、ベテラン冒険者がてこずるものまでさまざまいる。
ただ、基本的に強力な魔獣は森の奥に生息しており、街や街道周辺には強力な魔獣は出現しない。

そんな森の中に人目を忍ぶように1軒の小屋があった。その小屋の庭で一人の少年と一人の老婆が刀で打ち合いをしていた。
一人は学園の落ちこぼれ、ノゾム・バウンティス。
もう一人の老婆の名はシノという。
その打ち合いは圧倒的に老婆が勝っていた。それは学園でのマルス

との打ち合いなど比較にならなかった。
学園の試合で彼はマルスの斬撃をまかりなりにも凌いでいたが、老婆との打ち合いはさらに一方的で、ノゾムはまさに老婆のおもちゃだった。
刀での打ち合いは3合程で体制を崩され殴り飛ばされる。転がったノゾムに老婆はすぐさま追撃し、刀を躊躇なく振り下ろす。
ノゾムは脚部に気を集中させて爆発させる。気術の技の一つ、“瞬脚”である
一瞬で加速し、離脱するがすぐさま老婆も同じように瞬脚を使用し加速しつつ刀を納刀。離脱したノゾムの先に回り込み、抜刀術による抜き打ちを打ち込む。
勢いがついて止まり切れない彼は、片足を軸に体を回転させて抜き打ちを切り払うが体制が大きく崩れる。
そこに老婆の切り返しによる追撃が迫る。
ノゾムは刀を老婆の剣筋に対して斜めに寝かせ、わざと足の力を抜いて体を落とす。老婆の切り返しは寝かせた刀の上を滑り、彼の身体には当たらないが、同時に老婆の蹴りが襲う。
ノゾムは体を落とした状態では避けるのは無理と判断。咄嗟に足に力を入れ、後ろに飛ぶと同時に刀の柄を蹴りと体の間に入れるが大きく飛ばされる。
地面に転がったノゾムが体制を立て直す暇もなく老婆が追撃。首に刀を突き付ける。

「まいりました。」

「ふむ、まだまだじゃな。修練が足りん。」

老婆はそう言うと刀を納めた。この老婆、シノこそノゾムの刀術の師である。
彼女との出会いはノゾムが森の中で鍛錬していたときだった。

その時の彼はリサに振られ、誓いを果たせなくなったことで自暴自棄になっており、がむしゃらに鍛錬していた。
それは鍛錬でなく逃避。体がぼろぼろになるまで鍛錬することで恋人とのことを考えないようにしていた。
そのあまりの過酷さと無意味さに我慢できず老婆が声を掛けたことが始まりだった。

「そろそろ夕餉か、ノゾム、用意しとくれ。」

「はい。師匠。」

老婆の声にノゾムが答える。
その声には疲れが見えるものの、はっきりとした口調で夕餉の準備にかかる。

シノ　ｓｉｄｅ

（未だ引きずっているが、まだましになったかの）
老婆は彼の様子を見て声を出さずに呟く。
彼と出会ったとき、彼は森の中で鍛錬をしていが、その状態はひどいものだった。
蓄積された疲労を回復する間を与えないほど鍛錬を繰り返したせいで筋肉はやせ細り、頬はこけて餓鬼のようになっていた。剣を握る手の皮はズル剥け、関節は炎症を起こし、彼の体はぼろぼろになっていた。
あまりにひどいので口出ししたが一向に止める気配がない。
その時見た彼の顔には見た目どうり生気がなく、眼の奥には外見よりさらに暗い負の感情があった。
その眼に今の落ちぶれた自分を見た私はひどい嫌悪感に襲われた。
すぐさまその場を離れてしまった。

一時は無視を決め込んだが、時間とともに彼の暗い眼が気になった。
考えないようにしても頭をよぎる彼の眼に業を煮やし、様子を見に行くと彼は魔獣に襲われていた。
襲っていたのはワイルドドック。大陸中に生息する魔獣であり、群れで行動する。
魔獣のランクは低く、一般の冒険者でも討伐できるが、疲労が極限に達している彼には竜にも等しい脅威だった。
体中に傷を負い、流れ出す血とともに朦朧となる意識、まわりにはたすけてくれる普通の人間なら絶望的な状況でところが、彼は諦めがなかった。
もはや失血死してもおかしくないほどの血を失っても彼はワイルドドックに抗っていた。
“死にたくない”“あきらめない”
剣術、戦術はまだまだ未熟。しかし暗い感情を宿していた眼は“生きる”という明確で強い意志を輝かせていた。
それを見た瞬間、私は彼を襲っていたワイルドドックを切り飛ばしていた。

その1週間後、私の小屋の前で剣ではなく、刀を振るう少年の姿があった。

シノ　side　out

ノゾム　side

夕餉を済ませ、後片づけをして、食後のお茶を飲んでいる師匠の向かいに座り、俺もお茶を飲む。
師匠と出会い、刀術を師事してもらい、今日まで様々なことを教

わった。
闇の中でもがいていた自分に確かに光が見えた。
リサに振られ、誓いを果たせなくなり、周囲に誰もいなくなった。そんな日常からの逃避で無茶な鍛錬を続け、ボロボロになった自分を襲ってきたワイルドドック。
生死の境の中で“もう死にたい”という感情よりも“死にたくない”という思いをが湧いた。
“死にたくない”という感情は“生きたい”という感情になり、“あきらめない”という意思になった。
そんな窮地を師匠に救われ、弟子入りし、鍛錬を続けている。
リサのことを考えるとやっぱり辛い。けど、今は以前よりは気持ちは軽くなった。
それはやはり師匠がいるからだろう。
そんなことを考え、師匠を見ると満面の笑みでお茶菓子をほおばっている。鬼神のごとき強さを持つ師匠の年不相応のその姿に少しほほえましく感じる。

「なんじゃ。人の顔をじろじろ見て。さては私にほれたな？」

ふざける師匠に即座に反撃する。

「自分の年齢考えて発現してください。いくら俺でもさすがに師匠の年齢は守備範囲がッぶッ！！」

余計な事を言った俺の顔面に衝撃が走る。師匠が拳を抜き打ちのように振り、衝撃波をピンポイントで放ったのだ。
しかも卓上のお茶菓子にはそよ風すら吹かないという徹底ぶり。

「ノゾム、ナンダッテ？」

師匠が竜もかくやという表情で俺をにらむ。あまりの形相に脊髄反射で謝罪という自己保身に走る。

「イイエ、ナンデモアリマセン、シショウニミホレテイタダケデス。」

ツッコミだけなのに無駄に高度な技を披露する師匠。

彼女はこんなところに隠居しているが、実力は間違いなく大陸でも上位、師匠いわく“学園の中でもトップの剣士と並べるじゃろう”と言っていた。

ちなみに、学園最高の剣士はジハード・ラウンデル。Ｓランクの騎士で大陸でも超が付くほど名の知れた剣豪である。

そんな人物と同格な師匠。いったい何者か疑問である。

お茶を飲み終わりそろそろ寮に帰る時間となった。

「それでは師匠。俺は寮に戻ります。」

「うむ、ではまた明日な。」

「はい、師匠おやすみなさい。」

シノ　ｓｉｄｅ

私は帰っていくノゾムの背を見送り小屋に戻る。

彼は強くなった。能力抑圧に抑圧された身体能力のため本人も気付いていないし、刀の技量はまだ私のレベルに達していないが、かなり近づき、全く届かないとは思えない位置にある。

この１年間での成長を考えれば異常だ。

もともと彼の癖はこの大陸で使われている直剣より曲刀を使うことに向いていた。

腕の力で叩き切るより、体全体を使い断ち切る動きをしていたのだ。

何より彼を強くしたのは、本人の努力だろう。たとえそれが現実からの逃避からくるものでも。
はじめは単純な素振りのみを1日中させ続け、ひたすらに森を走らせた。
当然、魔獣に襲われもしたが自力でどうにかさせた。さすがに手の余る相手は私が気付かぬ様に処理したが。
次はひたすらに模擬戦である。
当然、私は持てるすべての技を死なない程度にあいつに打ち込んだ。
なすすべなく私に倒され、骨折、嘔吐、気絶は当たり前だった。
今はまだどうにか捌けるようになり、骨折などの重傷を負うことは少なくなっている。

私が課した修練を堪え切っているのだ。並みの奴なら1週間を経たずに辞めるだろう。
今の彼の技量なら本人の能力抑圧がなければ私とかなり打ち合えることは間違いない。
それでも模擬戦に勝てず、学園での成績も伸びないのはやはり能力抑圧の影響が大きい。
力、気量に制限を受け、魔力いたってはほぼ無く、初級魔法さえ使えない。
気術やアイテムによる強化もほとんど効果がなく、強化魔法も使えない。
これらのハンデを埋めるため、技や気の制御を磨いたが、使う技は必然的に一点集中型の高威力であり、殺傷能力が極めて高いので、学園の模擬戦では使えない。
幸い、肉体能力は瞬発力が必要となる筋力は能力抑圧による制限が厳しいが、本人の運動神経や持久力などの基礎能力は抑圧を受けていないようなので鍛えることができた。
しかし、気術等の強化の効果が低いので、それでも目に見えるほ

どではないし、相手が強化をかければ抑圧されていない能力でも相手が上回る。

なかなかうまくいかないものだ。

もう一つ気になるのが、本人のこれから先の目標が定まっていないということである。。

その場の戦闘では“生きるため”という理由でいいかもしれないが、これから先はそうではない。

“何のために強くなるのか”言うならば“こころの芯”が必要になる。

“こころの芯”がないまま力をつければ、いずれその力に振り回される。

そして彼の芯はすでに1度折れている。

これから先、彼がどうするのかわからないが、私はすべてを教えよう。彼が私のように後悔しないように。

シノ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第1章第2節（後書き）

いかがだったでしょうか。主人公の師匠であるシノは第1章の核となる人物で、後々の主人公に大きな影響を与えます。

このばあさん、８０歳ほどですが大陸でも十数人しかいないランクＳクラスの達人です。

ただ、意外に子供っぽく、怒ると即座に達人級の技が飛んできます。

また、今の主人公が訓練する理由はその根幹に“逃避”があります。

恋人に振られらことからまだ立ち直っていません。その辺も徐々に書いていこうと思います。

第1章第3節

ノゾムはいつものように学園に登校する。教室に入るとすでに登校していた生徒が彼を見るが、すぐにバカにしたような視線を浴びせる。彼の机には誹謗中傷がいくつも書かれ、それを片付ける彼を周囲がクスクスと笑う。

徹底した実力主義が基本方針であるこの学園は極めて明確に勝者と敗者を分ける。

このクラス、１０階級の生徒は間違いなく後者であり、この学年で最下層扱いされる。そんな敗者たちは、大抵自分たちよりさらに弱い者を見つけ、それに自分たちの不満をぶつけるのだ。

彼はこのクラスでは腫れ物扱いであり、彼が話しかけても徹底的に無視する。

彼に話しかけるのは担任のアンリ先生か素行が悪く、問題児のマルスくらいである。もっともマルスは徹底的に彼をこき下ろすことしか考えていないが。

「それでよ～その女がまたいいカラダで・・・・」

バカ話に花を咲かせながらマルスたち3人組がやってきた。マルスはこちらに気付くとニヤニヤ笑いながらやってくる。

マルスは背が高く、体格はいい。素の顔も悪くないがその人を馬鹿にするような表情がすべてを台無しにしていた。

「よう、落ちこぼれ。また無駄なことをやりに学園に来たのかよ。どうせなら便所掃除のほうがいいと思うぜ、まだ俺たちのためになるからよ。」

「おいマルスやめとけよ。こいつの掃除した便所なんて誰も使えね

えよ。」

「そうだぜ、それより俺たちの訓練人形なんてどうだ。武器の試し切りの役には立つだろう。」

ノゾムは何も言わない。いつもどうりの罵倒、いつもどうりの嘲笑、いつもどうりの日常の始まりだった。

ノゾム　ｓｉｄｅ

今日は午前中が魔法の講習だった。講師は保険医のノルン先生。

「知ってのとおり魔法は自身の精神力を糧に体内の魔素を隆起させ、さまざまな現象を顕現する技術だが、隆起させる対象は自身の魔素だけではなく外界、つまり大気中の魔素も可能である。

主に大規模魔法を使用する際は、必ずと言っていいほど外界の魔素を使用する。これは儀式魔法と呼ばれ、もともと精霊たちや神などに祈りをささげる神事が起源である。大勢の人が同じ様に祈りを捧げこれが現在の詠唱術の基礎でもある。

すなわち・・・・」

彼女は無駄なく、つづがなく授業を進めていく。アイリ先生の授業は彼女の雰囲気もあってどこかゆるい雰囲気だが、ノルン先生の授業は逆にシンと静まり返り、張り詰めるような雰囲気がある。

俺は先生の話すことを逐一メモを取っていた。能力抑圧によって実技の点が思うように取れない自分にとって、筆記試験はまさに生命線だ。１学年末の学年末試験の実技重視の試験では、追試試験に追加される筆記試験でどうにか進級した。実技試験に筆記試験が追加されるので普通の生徒ならさらに追い打ちだが、俺にとってはまさに最後の砦である。

授業終了の鐘とともに、講習の時間が終了し、実技の時間に入る。
ノルン先生の呼びかけとともにクラス全員が訓練場に移動する。
訓練場に到着し、それぞれが思い思いの魔法を使っているのを見ながら、俺はただ自分の中の魔力を感じ、操るという1学年でしかやらない訓練に没頭していた。

この大陸の人間は大なり小なり魔力を持っているが、俺の魔力はその中でも特に低い。元々はそこまで低くなかったが、能力抑圧が発現してからは初級魔法さえ使えなくなった。
だからこそ、ただ初級の鍛錬を繰り返し、制御力を上げることのみをしている。
その様子を見て周囲の生徒たちが再び笑い始める。それにつられてマルスがやってくると授業中にも関わらす俺をののしり始めた。

「なんだよ、まだ1年の時の訓練なのか最底辺。赤ん坊の歩行器がいるんじゃないか。ハハハハ。」

それらの嘲笑を無視して訓練に没頭する。そもそもこのとき俺には彼らの声が聞こえていなかった。
訓練に集中すると周りが見えなくなる。特に基礎訓練のときは顕著でこれは師匠と出会った時の状態でもある。

「・・・おい、何無視してんだ。」

俺が聞いていないことにイラついたのかマルスの雰囲気が一気に剣呑なものになる。元々彼は自己顕示欲の強い人間だ。
最下位の俺に馬鹿にされたと思ったのだろう。それでも俺には聞

こえない。完全に自分の内側の世界に籠ってしまっていた。
突然、横から衝撃を受け弾き飛ばされた。マルスが風の魔法で俺を吹き飛ばしたのだ。
放った魔法は“エア・バースト”風の魔法の一種で、圧縮した風を解放したときの衝撃波で相手を吹き飛ばす魔法だ。
まだ収まらないのかマルスが続けて魔法を放とうとする。だがその前にノルン先生の魔法がマルスの足元をえぐった。
「そこまでだ、これ以上は教師として必要な措置を取ることになるぞ。」
放たれた魔法は“エア・アロー”。風の初級魔法だが、詠唱速度はマルスより早く、精度、威力もマルスをしのぎ中級の単体魔法に匹敵している。
マルスのエア・バーストより彼女のエア・アローのほうがすぐれていることは明白だった。
「ちっ、わかりましたよ。」
捨て台詞を吐くようにマルスは離れていき、それにともなって周囲の生徒たちも訓練に戻る。
「大丈夫かい。」
ノルン先生が俺に声をかける。
「大丈夫です。」
俺は即座に答える。いつも師匠に吹き飛ばされているので受け身はとてもうまくなった。数少ない俺の特技である。
即座に訓練を再開する。この程度のことといつものことである。だからこそ、
「あの手の奴はどうやっても面倒になる。ノルン先生も君を心配し

ている。必要ならいつでも相談に来なさい。」

その言葉を真正面から受け取れず、生返事しか返せなかった。

ノゾムｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翌日、この日学園は休み、学生たちは束の間の休日を思い思いにすごしていた。

ノゾムはこの日、冒険者ギルドから仕事を受けて、商業区のバイトに来ていた。冒険者ギルドは様々な都市で仕事を斡旋しており、それはこの都市でも例外ではなかった。

仕事はランクが高ければ条件付きで弱い魔獣の討伐なども受けられるが、彼のランクは低いので主に雑用系しか受けられない。

彼の仕事の内容は単純な荷物運び。

商業区には各国からたくさんの荷が届くので、運び手は1人でも多いほうがいい。

荷を集めている集積場に来ると親方に挨拶をして自分の運ぶ荷を受け取る。受け取った荷を馬車に乗せ、相方と目的地まで運ぶ。

今日の荷は商業区の道具屋と職人区の医者。

どうやら店で使うものをまとめ買いしたらしく荷は多いが、行先は少ないので早く終わるだろう。

「そういえばノゾム。お前さん彼女はいるのかい？」

突然の質問とその内容にノゾムは思わず答えに詰まる。

「えっ、・・・・いませんよ。どうしたんですか急に。」

その様子にある程度の確信を得たのか相方の目の色が変わる。

「いや、なんとなくさ。いるにしろいないにしろ、おまえさん好きな人はいるんだろう。教えろよー。」

相方は性格明るく悪くないが、逆に相手の気分そっちのけで自分本位なところがあり、この手の話はしつこく聞いてくる。

“好きな人”の言葉を聞くたびに彼女の影がよぎり、つらくなる。

この手の話を聞かれることはあったが、その時の彼の様子を見て追及する者はいなかった。

「なあなあなあ、美人か、それとも可愛い系か、話を聞かせてくれよー。」

「・・・・・いきますよ。」

ノゾムは即座に馬を進める。相方がしつこく聞いてくが無視する。

仕事中ずっと質問してくる相方を表面上は受け流していたが、彼の表情は明らかに強張っていた。

終わると親方から給金を受け取り、ノゾムは即座に帰路に就いた。

彼の実家は一般的な農民なので、親の仕送りが期待できない彼には生活に必要なものである。

ソルミナティ学園の授業料は各国の援助のおかげで、学園の規模と比較しても十分良心的だ。

１０年前の大侵攻で失った人材の確保は各国でも死活問題で、それだけこの学園に各国が期待し、支援しているのが分かる。

この学園でどれだけ優秀な人間を確保するかが、今後の各国家間の優劣を決める大きな要素となる。

そのため優秀な人材を自国に引き入れることに各国は余念がなく、様々な好条件をつけてスカウトに来る。

特に俺の学年は過去に例を見ないくらい、優秀な生徒がいる。ランクにしてＡランクに足を踏み入れている生徒が５人もいるのだ。

Ａランクは一流の冒険者や近衛騎士などが保有するランクで、まだ十代後半の学生がこのランクに至ったと考えれば、彼らの優秀さが理解できるだろう。

ノゾムｓｉｄｅ

家への帰り道の途中、前方からよく知っている人たちが歩いてきた。ケン・ノーティスとリサ・ハウンズ。

かつての恋人と俺の幼馴染。

ふたりはデートの途中なのだろう。ケンは楽しそうに笑い、彼女もとても楽しそうでケンに心を許しているのが分かる。

ケンがこちらを見て俺に気付くと手を上げる。リサもこちらに気付くが、顔をしかめており、不機嫌さがありありと見える。

それを見て俺の心はきしりと軋んだ。

「やあノゾム、奇遇だね。」

ケンが気さくに話しかけてくる。その表情に彼女のような嫌悪感みえない。ケンは俺が彼女と別れた後も気さくに俺に話しかけてくる。リサと付き合っていることに対して複雑だが、以前と変わらず俺に接してくれるので、少しホッとしている。

「ああ、まあそうだな。どれくらいぶりになるのかな。」
「3ヶ月ぶりぐらいだよ。なかなか時間が合わないから。」
「仕方ないさ。俺と違ってそっちはやることがいっぱいあるんだろう。」
「うん、この前もジハード先生に稽古をお願いしたらつい熱が入っちゃって。」

ケンは、たははと苦笑いしながら話す。1階級の生徒となれば学園の期待も大きく、それ相応の待遇が約束される。それにケンは学園でもわずかしないAランクに到達した生徒だ。大陸に名立たる名士達から個人的に手ほどきを受けることができるのだ。

ケンと話をしていたら隣にいたリサが話しに割り込んできた。
「ケン、いくよ。」
彼女はそう言うとケンの手をとり、歩き出す。俺の顔を見るのもイヤなのかこちらを見ようともしない。
「あっ」
俺はつい引き止めようとしてしまうが、彼女のその横顔は明らかに俺を拒絶していた。
ケンの手を引き、去っていく彼女に結局俺は何も言えず、ただ立ちすくむしかなかった。

家に帰っても俺の心は落ち着いてくれなかった。彼女がどうして俺を拒絶するようになったのか。その理由はいまだ分からず、俺の

気持ちは宙ぶらりんのまま。

普段はそれほどでもなくなったが、学校でリサを見つけたり、恋人について聞かれたりすると気持ちがざわめき、やはりまだ引きずっていると自覚する。

彼女に拒絶されたときを思い出す。冷めた目でこちらを見つめる彼女。「さようなら」と一言だけ告げて彼女は背を向ける。

訳が分からず問い詰める俺に答えることなく、彼女は俺の前から去っていった。

あれ以来、俺の気持ちは止まったままだった。

第1章第3節（後書き）

いかがでしたか？幼馴染二人の登場です。いろいろと足りない分ですが徐々に主人公を含めた3人の関係について書いていこうと思います。

リサについてですが今言えるのは、彼女にも彼を振った理由が彼女なりにちゃんとあります。

それについても徐々に書いていきますので、長い目で見て頂けると幸いです。

第1章第4節（前書き）

今回は第1章の転機となる出来事があります。また新しい設定も出てきますので、それらも人物設定紹介、世界観設定に追記します。いろいろ考えましたが、この小説をできる限り続けることにしました。

完結目指して頑張りたいと思いますので、ご意見、ご感想をお待ちしています。

第1章第4節

ノゾムは次の日も商業区の集積場でバイトをしていた。
この日は相方はおらず、親方には集積場内の貨物の整理と記録を頼まれていた。
運ばれてきた荷と出荷した荷の確認が終わり、その旨を担当に伝えると、彼は伝えることがあるといい、ノゾムを自分のところに呼んだ。

「そう言えばノゾム、この間猟師が森で龍を見たっていう話を聞いたことあるか。」
「龍・・・ですか？」

龍。
大陸で最強の存在。
精霊種の1種で絶大な力を誇る。
かつては龍を倒し、その力を手にした者もいるらしい。
龍殺しと呼ばれるその存在は今現在おらず、歴史の教科書や伝説に残るのみである。

「でもこんなところに龍なんて伝説上の存在いますか？」
「おれもそう思う、おおかた竜を勘違いしたんだろう。まあお前はよく森に行くんだ、竜だとしても耳に入れておいたほうがいいと思ってな。」
そう言うと親方は二カッと笑った。
竜は龍と違い、魔獣の1種である。
力は龍に及ばず、また知能も低いが人間には非常に大きな脅威である。
その力は魔獣のカテゴリーでは間違いなく最上位の1種で。確か

にどう考えても俺では勝ち目はない。
「分かりました。気を付けます。」
俺は親方に礼を言いい、師匠のところへ行くために帰路についた。

ノゾムは家に帰り、愛刀などの準備をして師匠の小屋に向かう。
服装は魔獣の皮を使用した動きを妨げない最低限のもの、腰のベルトにはナイフとポーチを取り付け、ポーチの中にはポーション等の治療具一式、あとは、煙幕玉と音玉と爆雷玉が入っている。
煙幕玉はその名の通り煙幕を発生させるもの、音玉は大きな音を出して驚かせるもで、うまくいけば弱い魔獣なら追い返せる。
最後に爆雷玉。
これは投げた周囲に上位魔法に匹敵する雷を放つ物で値段もそれ相応に高い。
しかし、彼は基礎能力が低い上、威力のある気術も気量の関係上使用回数が限られるので、もしものためにと、師匠が買ってくれたものだ。このように自分自身に影響する強化系のアイテムの効果は制限されても、自分自身の能力に依存しないアイテムの威力は制限されないので、森に行くときは必ず持っていくようにしている。

シノの小屋に向かう途中、霧が出てきたので彼は少し足を速める。
その霧は段々と濃くなり、1メートル先も見えないほどになる。
「まずいな、これは。」
ノゾムはつぶやき、常備しているコンパスを見るとクルクル回り、

一定の方角を指さない。

「どういうことだ、これは。」

この森は確かに多くの魔獣がいるが、コンパスを狂わせるような特性はなかった。

異常な事態に焦る気持ちを深呼吸して落ち着かせると、周囲をもう一度確認してみた。

木々が生い茂り身を隠せるが、安心して休めるような場所ではない。

「とりあえずここにいても仕方がないか。」

とりあえず安全な場所の確保が必要と判断し、迷わないようにナイフで通る木々に印をつけながら歩く。

しばらく行くと森を抜けたらしく、木がなくなり、開けた場所にきた。

霧も徐々に晴れはじめたらしい。

彼がほっとした瞬間、突然周囲の風景がゆがんだ。

「えっ。」

次の瞬間、彼は見知らぬ場所に立っていた。

周囲を山々が囲み、見渡す限り不毛の地。明らかにアルカザム周辺ではない。

困惑している彼を巨大な影が覆った。

何事かと思い上を見た瞬間、ノゾムは絶句した。

巨大な黒い物体が空の半分を覆っていた。

それは巨大な5色6枚の翼を持ち、力強く羽ばたいている。
それには漆黒の鱗があり、その重厚さはそれの生きてきた年月を象徴しているようだ。
それの瞳は深淵の闇を抱き、地上のちっぽけな彼を睥睨している。
それすべてが絶望を体現していた。

“滅龍王ティアマット”

同族の龍族すら食らい、恐れられた異端中の異端の龍。
5千年以上前に地上から消えた伝説の龍がそこにいた。

ノゾムは呆然とした表情で佇んでいた。
今の自分の状況が理解できないのだ。
普通に考えればいくら魔獣が出るとはいえ自分の生活する街のすぐ目と鼻の先で伝説の龍に遭遇するなど考えない。

混乱している彼は知る由もないが実はこの空間はティアマットを持て余した龍族が大陸の地脈を使い、精霊たちの住む幽界と現実世界の狭間に作った仮初の世界でティアマットを封印するための世界なのだ。
ただ、所詮仮初の狭い世界、極端に強い力を持つティアマットの力を受けて揺らぐことがある。
その揺らぎは地脈を通し、つながれた地脈のせいで大陸のどこかに繋がり、道を作ることがある。
その道はティアマットが通るには遥かに小さいが、人間などのたいていの生物は通過できる。
彼はその道を知らないまま通り、この封印世界に来てしまったの

だ。
　ティアマットがノゾムを見下ろす。その眼には久しぶりの獲物を見つけた純粋な歓喜がある。
　漆黒の龍は翼をたたむと一直線にノゾムに向かって降下してきた。
　ノゾムは咄嗟に全身に気を張り巡らせ、地面を蹴ってその場から離れる。
　直後、轟音とともにティアマットが降り立つ。
　龍の自重と、降下時の衝撃で地面がめくり上がり、衝撃波とともに周囲に飛び散る。
　ノゾムは衝撃波にもみくちゃにされながら吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。
　咄嗟に受け身を取ったので目立った外傷はないが、飛び散った石や岩の破片で所々切り傷ができている。

　彼は即座に撤退を決めた。
　持っていた煙幕玉をすべて叩きつけ、発生した煙幕にまぎれて全速で森まで逃げる。
　森の木々に隠れてしまえば逃げる時間が稼げると彼は考えた。
　だが考えが甘かった。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
　彼が煙幕にまぎれて走っていると、途轍もない咆哮とともに煙幕が全て晴れてしまった。
　それだけではなく襲ってきた衝撃波で再び吹き飛ばされた。
　ティアマットの方を見ると、奴は一切動いていない、どうやら単

純な咆哮と、それに伴う衝撃波だけで、煙幕もろとも吹き飛ばされてしまったようだ。
ノゾムが驚愕しているとティマットは口を大きく開く、その口には黒い巨炎が集まる。
その炎は様々な色が混じった混沌の黒。
ノゾムは自分の本能が鳴らす最大の警報に従い、瞬脚で離脱する。
吐き出された巨炎は彼のギリギリ横を通過し森に着弾。

次の瞬間、世界から音が消失した。

ノゾムは気が付くと空を舞っていた。
人生初体験の空中遊泳、そんな自分を他人事のように感じていが、数秒後、地面に叩きつけられた衝撃で彼の意識は無理矢理現実に引き戻された。
落下の衝撃で痛むからだに鞭を打ち、ポーチからポーションを取り出して飲み干す。
回復薬が体を癒していくのを感じながら森のあった方を見て絶句した。

森は完全に焼失していた。

着弾地点にはソルミナティ学園が入ってしまうのでは思えるほどのクレーターができており、その中の存在は完全に消滅していた。
クレーター周辺の木々は吹き飛ばされた上、一瞬で焼き尽くされたのか、原形すら分からない状態で炭化している。
かろうじて焼かれなった木々も衝撃波ですべて根っこから吹き飛ばされていた。

呆然とした表情でティアマットに振り替えると漆黒の龍が翼を5色6枚の翼を広げた。

翼に無数の5色に彩られた光球が作られる。

“精霊魔法”

世界の眷属と呼ばれる精霊種たちが使用する魔法。精霊種以外が使用する他の魔法と違い、外界に干渉するプロセスを必要としない魔法は奴がその魔法を使うと決めた瞬間に発動し、他の魔法に比べ圧倒的な速攻が可能となる。

ノゾムは再び本能が鳴らした警鐘に従い気の身体強化を全力でかける。

無数の光球が光の尾を引きながらこちらへ向かってくる。その量は桁外れで彼の視界の大半を埋め尽くす。

ノゾムは全力で退避しながら刀で光球を切り払うが、あまりの量にたやすく光の群れに飲み込まれる。

それでも致命傷を避けようと全力で抵抗する。

光の雨がやんだとき、その場には身体中を貫かれたノゾムがいた。

彼は、ポーションを複数鷲掴みにして一気に煽る。

「ぐうぅぅ！」

ポーションが無理やり体を癒す感覚にうめきながらティアマットを見ると、奴は悠々とこちらに近づいてくる。

森の状態を見れば逃げることは不可能。

身を隠す森は焼失し、たとえ身を隠せてもまとめて吹き飛ばされる。

もはや彼に選択肢は一つしかなく、絶望しかない戦いが始まった。

「ハァハァハァハァ・・・」

戦いが始まって十数分。

いや、それは戦いではなかった。

戦いとは敵と成りえる存在がいてこそ成り立つものであるが、漆黒の龍にとってそんなものは目の前にはいない。
いるのは自分の退屈を紛らわせるだけの玩具である。

漆黒の龍ならば瞬きの内にノゾムを殺せるが、龍にとって、これは戦いではなく遊びである。
ちょうど猫が仕留めたネズミをもてあそぶように。
だが、それゆえにノゾムはこの永遠ともいえる十数分を生き延びられていた。

それでもその先は絶望しかなかった。
後先考えずに放った全力の斬撃や気術は鱗に傷すらつけられない。
ティアマットが振り下ろす腕を避けても衝撃波で吹き飛ばされる。
逃げることは状況的に不可能。
手持ちの道具には相手の鱗を貫けるものはない。
気量も尽きかけ、気術での身体強化も限界に近い。

そんな綱渡りの状況で、ついに限界が訪れる。何度目か分からないが、吹き飛ばされ、地面にたたきつけられた衝撃で体が痺れる。
気術の効果が切れたのだ。
最後のポーションを震える手で飲み下し、どうにか立ち上がる。

そんなノゾムにティアマットは再び塔の様な腕を振り上げる。
その腕を気術による強化ができない彼は避けきれない。
ノゾムは避けようの無い死を目の前にして、今までのことを走馬灯のように思い返していた。

ノゾムｓｉｄｅ

朦朧とした意識の中、絶望的な状況の前に走馬灯が流れ、自分自身の過去を思い返していた。
故郷にいる両親の笑顔。
「考えてみれば、ろくに親孝行してないな。」
いい両親だった。
リサを支えたいという自分の我儘に何も言わず、生活も良くないのに学園に通わせてくれた。

リサに出会い、一目惚れをした。
「考えてみれば初恋かあ、初恋は実らないっていうけどこれは実ったっていうのかな?」
あの時、告白し、一度は確かに想いが伝わった。しかし結局は・・・

リサの夢を支えたい。その誓いを胸に、ただその思いだけでソルミナティ学園の扉をたたいた。
「リサの夢を支えたい。そう願ったけど・・・今でもそうだけど・・・。」
思うように伸びない実力と成績、焦りが募り、足掻いたが能力抑圧の発現でその道を閉ざされた。

リサに突然別れを言い渡され、学園から孤立した。
「おれが・・・悪かったのかな、何でなのかな、何で・・・何も答えてくれなかったのかな・・・。」
いまでも胸の奥がいたい。考えるだけでいたい。彼女にとって俺は大したことない存在だったのかな。

師匠と出会い、わずかだけど光がさした。
「師匠に出会えてよかったな。破天荒な人だけど、間違いなくいい人だもんな。」
散々振り回され、地獄のような鍛練の日々だったが、彼女は間違いなく自分の身を案じてくれた。
初めは無視する気だったのに、ワイルドドックに襲われた自分を、文句を言いつつ助けてくれたのだから。
今思えば、彼女の前では以前の自分に戻れていた。素直に笑い、素直に怒っていたころの自分に。

次の瞬間、衝撃が彼を襲い、彼の思い出を彼の意識ごと消し去った。
ノゾムｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ティアマットの腕がノゾムの前の地面を叩く。その余波で彼は吹き飛ばされ、無様に地面を転がる。
ティアマットは明らかに遊んでいた。その表情は面白そうで、彼を完全に脅威としていない。

ティマットが大きく口を開く。その深奥に混沌の炎が集まる。彼で遊ぶのに飽きたのか、はたまた彼がどのくらい耐えられるのかを試しているのか。
いずれにしろ、今の彼には抵抗する術がなかった。
「ググ、アグッェ・・」
彼はすでに声にならない声をあげて、その炎を見つめる。

すでに彼の意識はほぼ無く、もはや過去を思うことすらできなかった。
走馬灯は過ぎ去り、ただ濃密な冷たい死の気配だけが彼を包んでいた。

“死ぬ。”

彼はその濃密な死を直視し、硬直する。

“死ぬ”

それはかつて森の中で一人ワイルドドックに襲われた時以上の“死”。

“嫌だ”

理性による思考能力のほぼない彼は、本能のままの思考を展開する。

“死にたくない”

それは強烈な生への渇望となって、彼の中の最後の命を燃やす。

“あきらめたくない”

それはかつてシノが見た強烈な生きる意志の発露。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

次の瞬間、彼は人のものとは思えない叫びをあげ、己の命を弄ぶ巨龍に吶喊した。

最後の命を燃やしつくすような咆哮とともにノゾムはティアマットに向かって踏み込む。その速度は死にかけの人間とは思えないほど速い。

しかし、やはり全快の時より遅く、ティアマットまで半分の距離も詰め寄れず炎が放たれる。

“遅い”

ノゾムの思考は、ただ生きるために目の前の脅威を排除することのみに集中している。その極限の集中力は彼の体感時間を何倍にも伸ばしていた。その中で彼は自分の動きの遅さに苛立っていた。

“どうして俺はこんなに遅い！！”

これでは目の前に迫る死の巨炎を避けられない。
ふと自分の体を見ると身体中を見たこともない鎖が縛っていた。

“こいつのせいか！！”

彼はこの鎖が自分の枷であると確信し、引き千切ろうと鎖に手をかける。
普通に考えれば鎖を引き千切るなど簡単にできるはずがない。だが彼にはなぜか鎖を千切れるという確信があった。

”邪魔・・すんなあああああああああああああああ！！！“

力任せに鎖を引くと、崩れるような音をたてて鎖がちぎれる。
次の瞬間、彼は一瞬で加速し、巨炎の下をくぐりぬけた。
あまりの加速にティアマットは一瞬彼を見失った。千載一遇の機会にノゾムは全力を掛ける。
身体には今までにないほど気力が満ち、血はいまだ流れているものの、身体は彼の思考を即座に反応する。
彼の身体の能力は明らかに全快時の状態以上に跳ね上がっていた。
走りながら抜いていた刀を納刀。納刀した刀に全力で気を送り込む。送り込んだ気を極圧縮。裂ぱくの気合とともに刀を抜刀する。

気術　“幻無”

髪の毛よりも細く、鋭く圧縮された気は、抜刀の速度と同じ速度で飛翔。ティアマットの両目を真一文字に切り裂いた。

考えてすらいない反撃にティアマットが咆哮し首を持ち上げる。

幻無は刀身に圧縮された気による斬撃を放つ単純な技だが、極圧縮された気は視認することは難しく、高速の抜刀術と同じ速度で飛び、十数メートル以内なら、ほぼ抜刀した瞬間に着弾するので回避は非常に困難である。

しかも極圧縮された気は、鋼鉄の盾だろうと魔法障壁だろうと問答無用で両断し着弾するので防御も難しく、極めて殺傷能力が高い技である。

ただ、気を極圧縮する必要があるので、半秒から数秒の溜めが必要であり、また複数の敵に囲まれた状況では大きな隙をさらすことになる。

ティアマットに駆け寄ると奴は前足を持ち上げ、何度も地面に打ち込んだ。

巨大な前足が何度も何度も地面を叩き、その度に地面が揺れ、局所的な地震を起こす。

ノゾムはあわてて離脱し、ギリギリ奴の前足の間合いから離れるが、あまりの地響きに足を取られる。

このままでは身動きが取れない。だが次の瞬間、地面が陥没しその穴にティアマットの巨体が入り込んだ。

どうやら地下に存在していた空洞を踏み抜いてしまったようだ。

ティアマットはどうにか抜け出そうとしているが、目をつぶされているのでうまくいかない。

ノゾムは奴との間合いを詰めながらポーチの中のそれを全て取り出し、一塊にして奴の頭に投げつける。

投げつけたのは音玉。それはティアマットの顔面近くで炸裂し、

強烈な音を周囲に響かせる。
至近距離で音玉の直撃を受けたティアマットは一瞬目を回し、動きが鈍る。

これがもし精霊ならここまで大きな影響は受けなかっただろう。
龍は精霊種の一種であるが源素の塊とはいえ物理的な肉体を持ち、生物としての側面を持っている。
物理的な肉体の感覚を使ってるがゆえに、不測の事態でその感覚が失われたり、混乱させらることがあると、その影響をもろに受けてしまうことがあるのだ。

もちろん彼ら龍は物理的な影響を受けやすいとはいえ精霊種である。それにふさわしい超常的な感覚も身に着けてはいるが、肥大しすぎた力を持ち、それゆえに理性の大半を維持できないディアマットはあり得ない事態の連続に完全に混乱していた。

ティアマットは完全に動きを止めている。ノゾムはティアマットのそばに全速力で駆け寄る。
狙うのは龍の首。首を狙った理由は、かの龍の頭の頭蓋を割れるか、ノゾムには自信がなかったからだ。

龍は物理的な肉体を持つ。つまりその肉体を死に至らしめることができれば、殺せるのである。
肝心なことは奴の肉体を殺すこと。
だた、龍自体が極めて強い肉体を持つので、容易ことではない。

ノゾムは持ち上げられた龍の首に向かって跳躍。再び納刀した刀に気を送り、極圧縮。抜刀しつつ、刀を一閃する。
気術“幻無”がティアマットの喉元の鱗を切り裂き、圧縮した気

が内部で炸裂。弾け飛んだ気は漆黒の鱗を内側から弾き飛ばし、やわらかい皮膚を露出させる。
さらにノゾムの追撃が放たれる。

気術“幻無　―回帰―”

先ほど一閃した抜き打ちの軌道を逆になぞる様に返しの一撃が放たれる。
その一撃はティアマットの首を深々と切り裂き、大量の血が湯水の如く噴き出す。
しかし、普通なら致命傷の傷を受けても漆黒の龍を倒すには足りない。
ノゾムは返しの一撃の勢いを利用し、体を一回転。回転の力と跳躍の勢いを合わせて、今切り裂さいた首の傷口に突貫する。
突き入れた刀は巨龍の首に深々と突き刺さり、刃は喉を通り、脳幹近くまで達するが、彼は突き入れた刀を支えに宙ぶらりんとなる。

「グガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

しかしそれでも龍は倒れない。
大地を揺るがす程の咆哮を響かせ、ノゾムを振り落とそうと大暴れする。

刀は肉に埋もれ、押すことも引くこともできない。このままでは振り落とされ、大地に血みどろの赤い花を咲かせることになる。
ノゾムは最後の力を振り絞って腰のポーチに手を伸ばす。
取り出したのは、最後に残っていた爆雷玉。
それをありったけの力で刀の刀身に叩きつける。

次の瞬間、眩い光とともに雷が奔った。上位魔法に匹敵する雷は突き入れた刀と首の神経を通り、龍の脳神経細胞を焼き切った。
だが雷は彼の体も焼き、残っていた力を完全に奪い取った。

龍の巨体が崩れ落ち、彼の身体が投げ出される。龍の身体はわずかに動いているが、その眼にはもはや生命の輝きはない。
やがて龍の巨体が崩れ落ち、光の粒子となって津波のように舞い上がる。
ノゾムは光の粒子が天に舞い上がる様子を、もはや考えることも出来ず、ただ見ていた。
彼自身も満身創痍、四肢あるが無事な所はひとつもない。
やがて光の粒子は、彼の上空で集まると、怒涛の勢いで彼めがけて落ちてきた。
限界を超え、動くことができない彼は迫りくる光の激流に飲まれ、意識を失った。

ゆっくりと意識が覚醒する。
いまだ夢の中にいる意識がティアマットとの戦いを思い出し、覚醒する。
激痛が全身を襲うが無理矢理上体を起こし、周囲を見渡すとそこは都市郊外の森の中だった。
「いつの間に・・・戻って・・・きたんだろう。」
訳の分からない状況の中、全身に走る痛みが先程の戦いが夢でないことを伝えてくる。

「とにかく師匠のところに・・・・・・」

自分がどれだけ意識を失っていたか分からないが、ここに居続けるのは得策ではない。そう判断し、ノゾムは痛む体を無理やり動かし、朦朧とした意識の中、シノの小屋へ向かう。

自分が歴史上数人しか存在しなかった“龍殺し”になったことに気付かないまま・・・・・。

第1章第4節（後書き）

第1章第5節投稿です。
いかがでしたか？今回ティアマットを倒して龍殺しになった主人公ですが、完全な最強にはなりません。理由は次回の話で説明します。彼がティアマットを倒せたのは、ティアマットの油断や龍の体の特性、５０００年間の封印、主人公のいきなりの能力の変化、空中ではなく地上だったなどいくつもの偶然が重なった結果です。本来なら彼ごときでは傷も負わせられません。

今回はいろんな意味で転機のきっかけとなる事件です。
そろそろ第1章の終結も近いです。第2章は設定はほぼできていますが、まだ執筆していません。
第1章の結末もまだ途中なので、少し時間がかかるかもしれませんが、ご容赦ください。
それではまた。

第1章第5節（前書き）

まずはじめにすみません。書き始めたら色々アイディアが浮かんで付け加えたので主人公の龍殺しの説明は次回になりました。
正確には完全な最強主人公にならない理由です。
今回はほとんどがシノばあさんの話。
考えてみたらシノばあさんは主人公を成長させるための存在なのにヒロインっぽい・・・
というかヒロイン登場していないｏｒｚ

第1章第5節

夢を見ている。ノゾムにはそこが何処だかわからないが、少なくとも夢であることは分かった。

真っ暗な空間の中に彼はただ一人立っている。その空間に地面はなく、一面を水が湖の湖畔の様に広がっている。

周囲には人や水以外のものは存在せず、風すら吹いていない。水面にも波はなく、全く音というものが聞こえない。

ふと彼が下を見ると、水中に何か巨大なものが見えた。漆黒の巨躯と5色6翼の翼。滅竜王ティアマットである。

巨龍はこちらを凝視してくる。その眼の奥にある感情がなんなのか、ノゾムにはわからなかった。

しばらくお互いが無言で見つめあっていると、徐々に周囲が明るくなってきた。どうやら目を覚ますらしい。

まだ自分が生きていることにすこし安堵しながら、再び龍に視線を移す。

龍はいまだこちらを見つめているが、やはりその表情は読めない。ノゾムは一抹の不安を抱えながら、白い光にのまれた。

「おや、起きたのかい。」

「うおあ！」

目の前にドアップで映ったのは皺くちゃの老婆の顔、ノゾムは思わず大声を上げて寝ていた布団を跳ね飛ばす。次の瞬間顔面に強烈な拳打をくらった。体中傷だらけの彼はその衝撃が傷に響き、声も出だせずにのた打ち回るハメになった。

「し、師匠ひどいです・・・・」

「ひどいのはどっちじゃ！せっかく人が森から連れてきて3日間も

看病してやったというのに！！！」

彼の全身には包帯が巻かれ、薬の香りが漂っている。本当に治療してくれていたようだ。

「すみません師匠。ありがとうございます。」

シノはいまだ頬を膨らませているが、その眼はとてもうれしそうだ。よほど心配してくれていたらしく、そのことを思うとノゾムは自分の胸が暖かくなってくるのを感じた。

「さて、3日間も徹夜で治療したんじゃ。あんなところでどうして傷だらけで倒れていたのか話してくれるんじゃろうな？」

師匠の纏う雰囲気がかわる。極致に達した達人の雰囲気に呑まれ、自然と背筋が伸びる。

「・・・わかりました。すべてお話しします。」

張り詰めた雰囲気の中、彼は自らの事の顛末を話し始めた。

数時間後、すべての顛末を話し終えた後には、静寂のみが残った。

「・・・・ついてくるんじゃ。」

師匠が一言だけいうと刀を取り、小屋の外へ向かう。ノゾムも刀を取り、外に向かう。

外に出るとお互い無言で刀を構える。構えるのはお互い抜刀術の構え。いまだ彼の体には無数の傷が残り、巻かれた包帯が痛々しい。

「いつッ！！」

ティアマットとの戦いで負った傷が痛み、声が漏れる、ぼろぼろの体は刀を構えるだけでつらい。

次の瞬間、師匠が一瞬で踏み込んできた。傷の痛みに意識を割かれていた彼は明らかに反応が遅れる。咄嗟に刀を抜刀するが今までの経験からどう考えても間に合わない。

しかし、シノの刀はノゾムの予想に反し、甲高い音とともに彼の刀にはじかれていた。

「えっ。」

彼は気の抜けた声をついもらしてしまう。今までの彼なら今の攻撃は防げなかった。

「やはりのう。」

「ど、どういうことですか師匠。」

シノが納得したように声を漏らす。その声に反応し、ノゾムが問いかける。彼は明らかに困惑している。

能力抑圧によって制限された能力は咄嗟の行動にも大きく影響する。筋肉の瞬発力が不足し気量も制限されているので、単純な行動では不意打ちを防ぎ切れない。そのため彼はその時の状況に対応した刀術の動きを欠かさず鍛錬しているのだが、今回のシノの斬撃は

その動きをする余裕はなく、単純な抜刀術で対応してしまった。
本来なら間に合わず、切り伏せられるが、なぜか防ぐことができた。その理由は、
「おぬしの身体能力が上がっているのじゃよ。」
それがシノの攻撃を防げた理由、
「で、でも俺は。」
「たしかに能力抑圧のせいでおぬしの身体能力は上がらん。しかし龍殺しは龍の力を継承し、さらに強くなるという。それがおぬしに起こったことじゃろう。」
「俺が、龍殺し・・・・」
ノゾムはさらなる困惑の渦にのまれる。当然だろう、龍殺しは伝説上の存在。一番新しい龍殺しでも生きていたのは数百年前、今現在は存在していない。
最強の継承者。絶大な力の体現者。既存の魔法では説明できないような魔法を使う者や異能に目覚めた者もいる。そんなおとぎ話の存在なのだ。
「といっても対して強化はされていないようだが・・・」
「えっ!!!」
伝説を否定しかねないシノの発言にノゾムはもっと困惑する。
「やはり能力抑圧の影響が大きいのじゃろう。そういえばおぬしティアマットの戦いのとき能力抑圧を解除した様じゃが今もできるの

か？」

師匠の言葉にあの戦いのときのことを思い出す。確かにあの時、自分を縛る鎖とそれを引きちぎる感覚があった。そしてその後の解放感。鋼鉄の楔を解き放ち、何処までも行けるのではないかとも思えるほどの感覚を思い出す。

ノゾムは己を縛る鎖をイメージした。すると体に巻きつけられた鎖が浮かび上がる。

「あっ。」

思わず声が上がる。

「どうやらできそうじゃのう。」

シノの言葉にノゾムはうなずく。

「それで・・・おぬし、どうするのじゃ。」

「どうするって・・・・。」

「その力、桁外れに強大じゃ、強い力は様々なものを引き付ける。地位、名誉、権力、嫉妬、あればきりがない。・・・改めて聞くぞ、おぬしこれからどうしたいのじゃ。」

「・・・・・・・」

ノゾムは答えられない。今までこれからのことなど考えなかった。今しか考えなかった。

いや、今も見えていない。彼はいまだ彼女に、過去にとらわれているのだから。

「前々から思っとった。おぬしにはこれ以上強くなる理由がない。」
「そ、そんなことは・・・」
言いよどみ、逃げ道を探そうとするノゾムにシノは厳格な態度と表情で断ずる。
「恋人のためか。かの女子はすでにおぬしの恋人ではなかろう。そやつを支えたいと思ってもそやつの隣にはすでに別の男がおる。おぬしが強くなる理由はない。・・・おぬしもすでに分かっていたことのはずじゃ。」
シノの言葉は容赦なくノゾムの心を抉る。今まで蓋をして無意識に考えようとしなかったことを無理矢理直視させられる。
ノゾムは言い返すことができず、ただ俯くしかなかった。自分でも分かっていたことだから。
今の彼女のそばに自分の居場所がないことも、すでに自分の居場所があの学園にはないことも。

「・・・まあいきなり先のことを決めろというのも無理じゃろう。今は傷を治すことに集中するとじゃ。」
“いずれ選択を迫られるがのう。”シノは最後そう言って釘を刺すと小屋へと戻る。
「・・・さすがにその怪我で街に変えるのは無理じゃろ、今日は泊まっていくがいい。」
小屋に入っていくシノを見届け、ノゾムも覚束ない足取りでシノの後を追う。その表情は曇ったままだった。

「そうじゃ、まだ言っとらんかった。」
「???」

シノが再びこちらを向くが、ノゾムは彼女が何を言う気なのかわからなかった。

「・・・おかえり。かんばったのう。」

彼女は嬉しそうに、本当に嬉しそう顔を綻ばせる。その顔は隠しきれない疲れが見えるものの、心からの安堵があった。
彼の身を案じ、ずっと付っきりで看病してくれたのだ。彼女の深い愛情はこの街に来てから凍りついた彼の心を優しく溶かす。
久しぶりの心からの愛情に彼の視界がゆがむ。

「た・・・だい・・ま。」

声はかすれ、やがて啜り泣きとなり誰もいない森に木霊する。
そのそばでシノはただ泣き続ける彼の背中をさすっていた。

シノｓｉｄｅ
目の前ですすり泣く彼の背中をさすりながら、私は彼をあやし続ける。まるで小さな子供の様だ。

・・・無理もないのかもしれない。恋人に捨てられ、今まで友達だと思って信じていた人たちからの嘲笑と侮蔑、私にも経験がある。

私はそもそもこの国の人間ではない。この大陸の東の果てにある島国の出身だ。

その国は領土こそ大きくないが独自の文化や気術、呪術（こちらでは魔法か）を発達させてきた。

高い山と海が隣接し、戦や魔獣の討伐では巨大な軍隊は身動きが取りづらく、勝利には必然的に個人、または少数で高い力量と、状況対応能力が求められた。

私たちの一族はその中でも群を抜いた武勲を誇っていた。刀術といえば間違いなく私の家が筆頭であり、私はその家の次女として、この世に生を受けた。

刀術の名家に生まれたがゆえに幼いころから刀の修行を強制されたが、それを当然だと思っていたし、私もそのことに疑問を抱かなかった。

才能があったのか、私はすぐさま頭角を現した。メキメキと腕を上げていく私に両親も誇らしそうだったし、歳の離れた姉も我が事のように喜んでくれた。

だから、私はますます刀術にのめり込んだ。自分でもどうしようもないほどに。

腕を上げ続け、遂には家のだれも私に勝てなくなった。

刀術の筆頭たる家で最も刀術に優れているということは、必然的にこの国の一番の使い手であるということだ。

そのため私には多くの弟子が師事を願い出てきたし、有力な権力者が強力な魔獣の討伐などをこぞって頼みこんできた。

刀のみの生活をしていたから、女らしく着飾ることもしなかったし、化粧や恋なども興味がなかった。

そんな私に両親は呆れて無理やり見合いを進めてきたが、姉だけは私の味方をしてくれた。

この時の姉は女の私が見惚れるほどの器量良しで、各地の名家たちがこぞって婚姻話を持ち掛けていた。

しかし、姉には心に決めた人がいるらしく、頑としてその縁談を受け入れなかった。

そんな日々を過ごしていたある日、私は彼と出会った。

彼は姉に付き添われて修練していた私のところにやってきた。

優しそうな瞳と穏やかな微笑み。体つきは一般の成年男子よりも小柄で、知的な雰囲気を醸し出していた。

彼はこの国の呪術の名家の3男で、頭首である彼の父が我が家に来るときの馬車に紛れ込んできたそうだ。

そしてそれに姉も結託し、屋敷にこっそり招きいれたと言っていた。

あきれ返る私に彼は真剣な表情で頼み込んできた。

「あなたがシノ殿ですね。実はあなたに折り入ってお願いがあるのです。」

彼の頼みとは自分に刀術を教えてほしいとのことだった。

何でも彼はほとんど魔力がなく、呪術の名家の中では落ちこぼれであり、居場所がなかったそうだ。

だからこそ、家族達に認めらる為に武術とそれに連なる気術の修練を独自にやっていたが、やはりうまくいかなかった。

そんな時、国の重鎮たちの会食のときに姉と知り合い、私の事を聞いたらしい。

姉もそんな彼の頼みを断りきれなかったそうだ。

彼の熱意を汲んで彼を試したが、まったくだめだった。

我流のせいで変な癖がつき、刀本来の鋭さがまるで生かされていない。体裁きも悪く、足や腰、腕がまるで連動していない。

はじめは話にならないと断ったが彼が余りにしつこいのと、姉の真摯な頼みを断りきれず、結局彼に刀術を教えることにした。

「違う！刀の持ち手が逆だ！！！師事される身なら基礎くらい身に着けてから来い！！！」

「何だそのへっぴり腰は！じじいの餅つきのほうがまだ迫力があるぞ！！！」

「泣くこともわめくことも許さん！きさまは私の練習用の木偶だ！本物の斬撃というものを体に教え込んでやる！！！」

・・・まあ今思えば私も少しとがっていた頃だったからちょっとだけやりすぎたかもしれん・・・

はじめはろくに基礎すらできなかったが、徐々に彼は強くなっていた。

姉はそのことをとても喜んでいたし、わたしは表に出せなかったが嬉しかった。

自分がはじめから仕込んだ弟子が強くなっていくのだ。嬉しいわけがない。

この頃からか、私は時々彼の事で考え込むようになった。

食事のとき、寝ているとき、湯浴みをしているとき、修練をしているとき。

やがて時間も場所も関係なく彼のことを思い出すようになり、姉に相談したが、

「誰でもそんなときがあるわ、気にしなくても大丈夫、いずれ治まるわ。」

といった。

しかし、それは治まるどころかますます大きくなり、どうしようもなくなっていった。

そんな様子を見た我が家の女中が尋ねてきた。

「シノ様、もしかして恋をしていらっしゃるのですか？」

その一言は今までの私をひっくり返してしまった。

「こ、恋？」

「はい、恋です。やはりシノ様は恋をしていらっしゃるのですね。」

「し、しかし・・私が恋など。」

「シノ様。恋は誰にも訪れます。そしてそれは誰に止められません。たとえ神様でも恋に落ちることがあるのですから。」

その女中に話を聞いているうちに、私は自分の恋心を完全に自覚してしまった。

そして自覚してしまうと自分でもどうしようもないほど彼を意識してしまう。

彼の立ち姿や真摯に修練を打ち込むときの瞳。休憩時間中のたわいない話や彼の修練服からの汗のにおいにすら心を躍らせてしまう。

そんな自分が嫌でつい彼を避けてしまったときも会った。

「どうして私を避けるのですか。」

かれが私に問いつめる

「・・・避けてなどいない。」
「うそです。今までのように私に目を合わせる事すらしなくなったではありませんか。」
「・・・勘違いだ。」
「いいえ。勘違いなどではございません。」
「ずいぶんと自信たっぷりだな。」
「はい、ずっとあなたを見ていましたから、あなたが私の事を知るよりずっと前から。あなただけを」
「・・・なに？」

彼の言葉に何か深い意味を感じてつい問い返してしまった。

「・・・ずっとあなたに憧れていました。この国随一の刀術を誇り、それに驕らない高潔な心とその刀のように透き通る瞳に。私ごときがこのようなことを言うのは分不相応だと思っていますが・・・私はあなたを愛しております。この世の誰よりも。」

それは間違いなく愛の告白。

私の心臓は私の胸を破裂させるほど高鳴り、顔は夕焼けよりも赤くなり、私は彼の顔を見ることができず、彼に背を向ける。

「・・・馬鹿か貴様は。私のような女の身だしなみひとつできぬ様な者を好くなど。」

普通の男なら私より姉のような女性らしい人を好くだろうに。

「かもせしれません。ですが私が愛したのはあなたです。ほかの誰でもありません。・・・もしよければ私とともに歩んではくれませ

んか？」

「・・・馬鹿だ馬鹿だと思っていたがこれほどの馬鹿とはな・・・この・・・阿呆。」

「ええ馬鹿です。それで、答えを聞かせてはくれませんか。」

「・・・あなた様の気持ち、確かに受け取りました。不束者ではございますが末永くよろしくお願いいたします。」

私は彼とともに歩むことをこのとき誓った。

私と彼との仲はすぐに知れ渡り、あれよあれよという間に祝言の日取りまで決まってしまった。

武術の名家と呪術の目池の縁談は大々的に告知され、両親も喜んでくれた。

ただ、姉は体調が良くないらしく部屋にこもることが多くなっていた。

そして祝言の日、あの事件が起こった。

その日集まった親戚の前で突然一人の男が私に言い放った。
「彼女は将来を誓った相手がいるにもかかわらず、ほかの男と蜜月をかわしている。この祝言は穢れに満ちたものであるぞ！！！」
その男はかつて姉に求婚して来た男の1人で、縁談を断られ、我が家にまで詰め掛けてきたことのある男だった。
突然の出来事に祝言の場は騒然とし、誰もが困惑していた。私はその男の言うことがでたらめであると断言したが、その男は自信満々にこういった。
「ならば彼女の部屋を確かめれば良かろう。」
と、そして私の部屋からは身に覚えのない男の下着が見つかった。
このことで新郎側の親族は激怒し、祝言はご破算となり、私は両親から責め立てられた。
私は必死に無実を訴えたが聞いてもらえず、彼も冷たい瞳を私に向けるだけだった。
私は姦淫をしたことで破門され、部屋に軟禁された。
そして1年ほどたったある日。姉が私を訪ねてきてこういった。
「あのときの男、あれは私が差し向けたの。」
「・・・えっ。」

「あなたを祝言の場で問い詰めれば縁談の話を考えるといってね。そうしたらあの男、大喜びして話に乗ったわ。」

「な・・んで・ですか、あねうえ。」

そう問いかける私に姉は憤怒の表情で詰め寄ってきた。今まで見たこともない姉の表情に恐怖し、後ずさる。

「あなたが彼を私から奪ったから、私が最初にあの人を見つけたのに！私のほうがずっとあの人を見守ってきたのに！！！」

その表情はまさに鬼女と呼ぶに相応しい顔だった。姉は私の髪の毛をつかみ上げて呪いの言葉を吐く。

「絶対に許さない！！あなたのすべてを奪ってやる！！！地位、名誉、なにもかも！！人として2度と幸せを掴めないようにしてやる！！！！」

ブチブチと髪が千切れて痛み、私は子供のように懇願するが姉は一向にやめない。

「どちらにしてもあなたの居場所はこの家にはもうないわ。誰もあなたを庇わないし、助けない。じゃあねシノ。安心していいわよ、私が彼と生涯を添い遂げるから。」

姉はそう言うときびすを返し部屋から出て行く。

私はどうすることできず、ただ泣くしかできなかった。

結局、私は家を出て行った。私の祝言での話は国中に知れ渡っていたため、国の中にも居場所はなく流れ続けてこの場所にたどり着いた。

「おぬしとわし、驚くほど似ておるのう。」

同じように見捨てられ、打ち捨てられたもの同士。はじめこそ過去の自分を見て嫌悪してたが、今ではかけがえのない弟子だ。

気がつくと弟子は泣きつかれたのか眠り込んでしまっていた。

その表情に顔が綻ぶが・・

「グッ!!」

突然視界がゆがむ、頭が朦朧とし、意識が保てなくなりそうになる。

「ええい!このポンコツな体め!」

意識をどうにか繋げると視界がはっきりとしてくる。

(・・・最近間隔が短くなってきている。もう・・長くないのう)

“睡死病”

本人の気が徐々に低下し、死にいたる病。原因は特定されておら

ず、完治は極めて困難な病気である。
治った例は数例しかなく、治った理由も特定されていない。
この病気は徐々に体から気が抜けていき、最後は眠るように死に至る。
しかしシノの顔には死の恐怖はない、あるのは後悔の念。

（もっと色々おぬしと話をしたかったのう。刀の技ばかり教えて・・わしらしいといえば、らしいがのう）

胸の中で眠るノゾムを見ながら、彼女は決心を固める。

（最後におぬしに伝えることが、伝えたいことがある。そのときは・・全力で・・）

シノｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第1章第5節（後書き）

どうでしたか今回はシノばあさんと主人公の絆の確認とシノばあさんの過去話でした。
私では女性のドロドロとした関係を表現し切れませんでした・・・・
すみません（涙）

第1章第6節（前書き）

まず皆さんに謝罪をさせてください。
以前主人公が普通の最強にならない理由を今回の話で説明するつもりでしたが、ちょっといろいろアイディアが湧いて書き足していたらその理由を書けなくなってしまいました。
書けるのはおそらく第2章の初めか、その時更新する登場人物紹介で書くと思います。
これも偏に私の行き当たりばったりの執筆が原因です。すみませんでした。

第1章第6節

ノゾムside

ティアマットとの戦いからおよそ3週間。師匠の手当のおかげで俺はどうにか日常の生活を送れるようになっていた。

師匠の薬は彼女のオリジナルらしく、ポーションの様な急激な回復力は無いが、体の治癒能力を無理なく高めてくれる薬らしい。

戦場のような即座の回復が求められる場所ならともかく、ゆっくり休める街中では非常に頼りになる薬だ。

しかしこの3週間の間ろくに動けず、おまけに学園を3日間も無断欠席したため、3日ぶりに登校したときはアイリ先生に相当絞られる羽目になる。

だが、意外なことに3日間の無断欠席と全治3週間の傷は学園ではあまり騒がれなかった。

というのも、3日ぶりに登校したノゾムの体の傷を見たマルスが、

「なんだ、ボーっと道を歩いて馬車にでも轢かれたか。まったく、鈍すぎるぜ。」

と、いつもどうりの調子で馬鹿にしてきて、しかも周りもそれに同調したものだからそのまま有耶無耶になってしまった。

もっとも自分も否定しなかったのが原因の一つでもあるが。

ただアンリ先生は誤魔化されてはくれず、そのまま職員室でお説教コース行きになってしまった。

「ノゾム君、なにか隠しているでしょう～～～。さすがに無断欠席の後にそんな怪我を負っているなんて、普通じゃないわよ～～～。」

「い、いえ、別に大したことじゃありませんよ。単純に仕事中にドジをして怪我しただけで・・・」

「嘘よ。ノゾム君森に入るでしょう～。龍が出る、なんて噂はさすがにただの噂でしょうけど、それでも森の奥にいる強力な魔獣が街道の近くに来ることはあるわ～。」

・・・すいません。マジで龍でした。しかも結果的に倒してしまいました。などとは言えず、結局仕事中に事故があって、その事故に巻き込まれたことが原因と言い張った。

「じゃあどうして無断欠席なんてしたの～、ノゾム君は寮住まいだから学校に連絡はできるわよね～。」

「怪我のせいで熱を出して寝込んでいたんです。それに俺のことを気にかけてくれる同級生はこの学校にはいませんし・・・。」

・・・自分で言っていて少し悲しくなる。友人がいないのは事実だし、さすがに本当のことは言えないし。

ここはどうにかして言い逃れようとしていた俺だけど、

「・・ぐす。」

なんとアンリ先生が泣き出したのだ。

突然のことで俺は困惑する。

「えっ。と、突然どうしたんですか。」

「え～～ん！ノゾム君はわたしのこと信じてくれないのね～～～！！こんな頼りない半人前のことなんか～～！！！」

「えっ、え。ち、違いますよ。どうしてそんな話になるんですか！！」

「だって本当の事話してくれないんだもの～～～！！傷はどう見ても戦いの傷だし、事故があったなんて街では聞かないし、手当に使われてる薬はこの街で出回っている薬じゃないし～～！！。」

・・・やっぱり誤魔化すのは無理があったようだ。

でもやっぱり本当の事は話せない。どうにか誤魔化そうとする俺と、泣きながら俺を問いただそうとするアンリ先生との攻防がしばらく続く。・・・というかアンリ先生の泣き顔は反則です。

優しそうな瞳を涙でうるませてこちらを見つめてくる美女。しか

も彼女は純粋にこちらを心配しているだけ。
男ならその表情を見たら何でも言うことを聞いてしまいそうだ。
・・・というかこの人、天然で男を落とすタイプの人間だよな、
しかも本人に自覚がないから尚の事たちが悪い。
「ノゾム君・・・はなしてくれないの？」
だ・か・ら反則ですってば！！！！

結果から言えば授業開始の鐘によってアンリ先生の説教という名の涙目攻撃は終了。俺は逃げるように職員室から退散した。
でもやっぱりアンリ先生は不満そうで、午前中の授業の間ずっとプリプリ怒っていた。

・・・すいません先生。

「ノゾム君！ボーとしていないでこの問題を解きなさ〜〜い！」
そして授業中に集中的に指名される俺。
・・・・アンリ先生、いくらなんでも大人げないです・・・・・

午後は戦闘術の授業。前回と同じようにクラス内での模擬戦である。
俺の相手は・・・

「またお前か最底辺。」

よりにもよってまたマルスである。

「お前も運がないな、この間に続いて俺が相手なんてな。まあ、お前じゃ誰が相手でも勝てないから気にする必要はないか。ハハハハハハハハ！！」

相も変わらず人を馬鹿にしてくるマルスを無視して自分の立ち位置に立ち、自分の状態を確認する。

怪我の様子は大丈夫。きちんと治っている。

刀も大丈夫。模造刀だが自分の愛刀とほぼ変わらない感覚で振るえる。

能力抑圧は・・・どうやら解除できそうだ。

でも・・・解除はしない。

夢に見たティアマットとその時に感じた一抹の不安。そして解除してしまうことで自分の何かが壊れてしまいそうな予感。

それらが自分の楔を解き放つことを躊躇わせていた。

「それでは、はじめ～～。」

ノルン先生の掛け声とともにマルスがこちらに迫ってくる。

はじめから俺を叩きつぶす気なのか、今回はすでに気術による身体強化を既に使用しているようだ。

突進してくるマルスから目を離さないようにして気術を使用し、身体能力を上げる。

「つぶれちまいな！！！」

マルスが大剣を上段から振り下ろそうとして、横薙ぎに変化させる。

俺は体を回転させて勢いをつけ、刀を大剣の下を打ち上げるように振り上げる。刀は大剣の下側を打ち上げマルスの剣筋を逸らす。

マルスはすぐさま剣の軌道を修正し、唐竹に振り下ろす。

俺は手首を返してマルスの剣筋に対して刀を斜めにかかげる。同時に足の力を抜いて衝撃を吸収し、剣戟を受け流す。

龍殺しとなったことで、わずかとはいえ上昇した身体能力は俺の体勢をマルスの斬撃で崩すことなく受け流すことを可能にしていた。

そのまま間合いに踏み込み刀を一閃する。

マルスは前回のようにガントレットで防ぐがこちらはすでにその行動を考慮している。

一閃させた斬撃のあたる瞬間、俺はわざと力を抜く。刀はガントレットで防がれるが、力を抜いていたことで即座に次の行動に移れる。

振りぬいた刀の勢いを利用し、さらに一歩踏み込むと刀から片手を離し、さらに踏み込みの勢いを拳に乗せて、マルスの腹部に痛烈な拳打を打ち込む。

「がっ！」

マルスの顔が苦悶にゆがみ。体がくの字に折れる。

さらに下がったマルスの頭を抱え、その顔に膝蹴りを叩きこむ。

マルスは鼻血を噴出させながらよろめく。

さらに攻撃を加えようとするが・・・

「こ、この屑がああああああああああああ！！！」

マルスの絶叫とともに大量の気が噴出する。

無作為に放出された気に押され、俺は一時互いの間合いの外に後退する。

マルスは憤怒の表情で俺をにらみつける。

自分の前に這いつくばるだけだった弱者に予想もしない反撃をくらい。完全にキレていた。

「殺す！この糞野郎！！絶対殺してやる！！！！！」

マルスは激高したまま大剣に気を送り込む。注がれた気は猛烈な風の刃となって大剣に纏わりつく。

気術　“塵風刃”

剣に纏わりついた風の刃が近づく物体を切り刻む気術である。

また剣の周囲の風は相手の防御も弾き飛ばすので、風の刃に弾き飛ばされないほどの膂力で防ぐか、回避するしかない。

マルスは俺に風の刃を振り下ろす。

俺はその刃の軌道を見切って躱すが、マルスはそのまま連撃を放

つ。

その刃をかわし続ける。俺の膂力では今のマルスの剣を受け流そうとしても周囲の風に弾かれる。

だが怒りに支配されているマルスの剣撃は前回の模擬戦時よりも単調で、躱し続けること事には支障はない。

それを可能にしていたのは若干とはいえ上がった身体能力だ。

能力抑圧が効いている状況下では、俺の今の身体能力は他の生徒たちと比べればやはり劣る。

それでもわずかとはいえ上昇した能力は俺の戦い方の幅をかなり広げてくれている。

今までは受け流すしかなかったが、いまは身体強化をして回避に集中すればマルスの斬撃をどうにか躱すことはできるようになっている。

俺は自分の成長を確かに感じながら、次の手の準備を始めた。

ノゾムｓｉｄｅ　ｏｕｔ

マルスｓｉｄｅ

「どういうことだ！」

マルスは明らかに今までと動機の違う奴に戸惑っていた。

「なんで俺の剣が当たらない！！！！」

今までの奴はこれほどの動きはできなかった。

剣を受ければよろめき、回避は無様に地面を転がるだけだった。

最近は多少捌けるようだったがそれでも結果は変わらず、いずれ無様に地面に転がるだけだった。

だが今の奴の動きにそんな結果を見ることはできなかった。

俺たちに比べれば動き自体は遅いが、きわめて的確な回避。俺の剣だけでなく纏う風の刃すら見切っているのではと思えるほどの見切り。

ふと奴の顔を見るとその表情に焦りはない。確信した。あいつは俺の剣を完全に見切っている。

「ありえね・・・ありえるかよ！そんなこと！！！」

奴は2学年最底辺。対する俺は実技なら学年の中でも上位。

俺の実力はBランクでも通用する自信がある。

俺は奴のふとアビリティを思い出した。

“能力抑圧”

本人の能力を一定以下に落としてしまうアビリティ。確か奴は力、気量、魔力に制限を掛けられていたはずだ。

そんな足枷をつけた状態でその俺の剣を見切っている奴は、本来ならどれほどの実力を身に着けていたのだろう。そしてそんな足枷をつけてもなお身体能力を上げたあいつはどれほどの修練を積んだのだろうか。

“・・・認められねえ。認めてたまるか！”

奴の隠れた実力を冷静に判断していた理性の警告を感情が握りつぶす。

それが、俺の敗因だった。

マルスｓｉｄｅ　ｏｕｔ

マルスは今まで自分の力に自信を持っていた。生まれつき気量が多く、体格が優れていた彼はすぐに強くなり、周囲に彼に勝てる者

はいなくなった。

いまだ１０階級にいるが実力はある。そんな彼の力に対するプライドが彼の眼を曇らせた。

マルスの斬撃にノゾムがわずかに体勢を崩す。マルスはここぞとばかりに剣を振り下ろすが、それはノゾムの罠だった。

崩れたと思えたノゾムは瞬時に体勢を立て直すと、後方へ跳躍、マルスの剣は地面に突き刺さり、剣に巻き付いていた風の刃が周囲に土を巻き上げ、彼の視界を遮る。

「くそがあああああ！！」

焦ったマルスは剣に纏わりついていた風の刃を今ノゾムがいたと思われる方向に開放する。

気術“裂塵鎚”

風の刃たちは風の塊となって、まるで破城槌のように突進する。

この選択は偶然にも周囲の土煙を吹き飛ばし、マルスの視界を確保するが、その時彼の目に飛び込んできた光景は己の選択の間違いを突きつける。

裂塵鎚を放った先にノゾムはおらず、彼はすでにマルスの横にいた。

土煙がマルスの視界を覆った時、彼は瞬時に瞬脚を発動、刀を納刀し、マルスの側面に回り込んでいた。

2人の視線が交差する。ノゾムは抜刀術の体勢を既に完了し、マルスは大きな隙をさらしたまま。

マルスには回避は不可能と判断。咄嗟にガントレットで防ごうとするが体勢が崩れ、行動がわずかに遅れる。

ノゾムの刀が抜刀される瞬間。

ゴ〜〜〜ン、ゴ〜〜〜ン、ゴ〜〜〜ン

「は〜〜い。試合は終了で〜〜す。今日の授業はこれで終わりだけどみんなしっかり復習してね〜〜。」

授業終了の鐘が鳴り、ノルン先生の号令とともに授業の緊張感から解放されたクラスメートたちが思い思いの話をし始める。

ノゾムは半ばまで抜いた刀を収めると踵を返す。

マルスはただ何も言わず、訓練場を後にするノゾムの背中を見つめるだけ。

「おいマルス。どうだった、今日の落ちこぼれは。」

「見たところあいつ、今日は無事みたいだな。マルス、いくら相手するのがめんどくさいからって手抜きしすぎたんじゃないか！」

取り巻きの2人が何か言ってるが、マルスにはその言葉は全く聞こえていなかった。

マルスside

あいつは間違いなく強くなっている。いや、元々強くて俺たちが気づいていなかっただけか？

少なくとも剣の技量なら間違いなく俺より上だろう。今日の模擬戦の結果がそれを示している。

「・・・なんだこのモヤモヤ感は・・・」

気持ちが落ち着かない。胸の内から怒りが湧き上がる・・・なぜだ。

あいつが実力を隠していたこと？

・・・違う。少なくとも今あいつの事を考えても怒りは湧かない。

じゃあ誰に対して・・・・・・・・・・・・そうか・・・俺に対してか。

・・・・俺はこれほど俺自身に怒りを覚えたことはない。

・・・俺は自分の強さに誇りがある。少なくとも弱くて何もできないくせに陰でコソコソやる奴は大嫌いだ。

そしてそれ以上に踏み躙られても抵抗せずそれを受け入れるような奴はもっと嫌いだ。

今まで俺のあいつに対する感情はまさにそれだ。学年最底辺の扱いをされても表情一つ変えずにそれを受け入れるあいつ。それはまさに俺の一番嫌いな奴そのものだった。

だけど実際はどうだ。

あいつは誰よりも抗っていた。理由は分からないが、強くなろうとしていた。

そしてその努力は俺なんかが想像もつかないレベルだろう。

能力抑圧を持つ人間の能力が制限を超えて上がるなんて聞いたこともない。

それほど努力して抗っていたやつに俺たちがしてきた事はなんだ。ただ憂さ晴らしに罵声と嘲笑を浴びせてきただけじゃないか。

今までの自分に強い憤りを感じながら、俺は訓練場から出ていくあいつを見続けた。

マルスｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第1章第6節（後書き）

第1章第6節終了です。どうでしたでしょうか。
今回の話は主人公の実力の片鱗を垣間見たマルス君です。
マルス君は単純に周囲の扱いに抵抗しない（実際主人公は逃避していましたからマルス君の勘違いも多少あります）主人公が気に入らなかっただけです。
つっぱっていて不器用な少年なんです。
さて、そろそろ第1章終幕が近づいてきました。あと2話ほどで終了・・・できればいいなあ（汗）
明日から仕事で更新が2、3日できなくなりますがご容赦ください。
・・・というかこの小説楽しみにして下さる方いらっしゃるのかな（汗）

第1章終幕・前編（前書き）

第1章終幕・前編投稿です。
2、3日投稿できないはずでしたが投稿できました。

第1章終幕・前編

ノゾムｓｉｄｅ

マルスとの再度の模擬戦から数日後、この日、俺は放課後すぐに寮に帰ると師匠のところへ向かう。　今日は師匠から授業が終わったら小屋まで来るように言われていた。

実は学年末試験が近く、試験まで残り2日と迫っていた。

いくら多少能力が上がったとしてもソルミナティ学園の試験は難解だ。

それが学年末試験ともなれば難しい試験がさらに難しくなる。

特に俺は筆記試験でどうにか進級してきたので、試験勉強に集中したかった。

いつもなら試験の直前には修行は控え、試験に集中するのだが、今回はどういうわけか師匠が今日絶対に来るよう念を押していた。

「絶対に来いだなんて、師匠どうしたんだろう。」

いつもと違い真剣な表情で「いいか。絶対にくるのじゃぞ！」と念を押していた師匠の様子に少し不安になる。

師匠の小屋に到着すると、彼女は普通に小屋でお茶を飲んでいた。

「お～お～、ノゾム来たか。」

そのあまりにいつもと変わらない様子に脱力してしまう。

「師匠、どうしたんです今日は。俺、そろそろ試験が近いので追い

込みかけないとさすがに不味いんですけど。」

はっきり言って切実な問題である。今は多少だが身体能力が上がり、以前は修練ならともかく戦いでは使えない技が使えるようになったことで、戦いの選択肢が広がったがそれでも厳しいのは変わらない。

「まあまあそういうな。今日ぐらいわしに付き合え。こんな美女のお誘い、受けねば男でないぞ～。」

・・・何言ってるんだろうかこの人は・・・

「・・・師匠。昼間から酒でも飲んでるんですか？」

「そんなわけなかろう！お前はもっと師を敬わかんか。」

「敬ってますよ。師匠が悪質な詐欺師まがいなこと言わなければ。」

「誰が詐欺師か！それにわしが何時そんなこと言った！！！」

師匠、詐欺師はみんなそう言いますよ。

「美女ってあたりウソでしょう！よく言って元・美女です！！」

「・・・ソコニナオレ」

師匠が鬼の形相で刀に手を掛ける。彼女の体から目で見えるほどの殺気が立ち上る。小屋の周りの野鳥たちが一斉に飛び立ち、少しでも場から離れようと羽ばたく。

・・・・メチャクチャこわい。師匠の髪は逆立ち、まさしくオーガ・・・彼女の故郷を考えれば夜叉というべきか。
でも俺だって負けられない。いつもちょっとした冗談でボコボコにされ、ツッコミにすら高ランクに相当する技を放ってくるのだ。
彼女は殺す殺さないの力加減はできても、その場に合わせた力加減が全くできない（と思われる）。
いい加減この等価交換の法則にケンカを売っている人に力加減というものを教えなくてはならない。
・・・でないといつまでも日常生活で日常的に気絶なんてアホな状態から抜け出せない！！！

「お、おれだっていつまでもこんな理不尽「（キンッ！）ナニカイッタカエ」イエナニモイッテイマセン、イツモシショウキョウモオキレイデスネー。」

・・・できませんでした。
・・・師匠、真剣を殺気と一緒に首筋に当てるのは勘弁してください・・・・

それから師匠は特に取り留めのないことを話しはじめた。故郷の国の事。家族の事。この大陸に来てからの事。
彼女は俺の話も聞きたがったので、これまでのことを話した。故郷の村の事。両親の事。リサの事。学園での出来事、師匠と出会った時の事、その後の地獄のような修行の事。

師匠も既に知っていることもあったけど、彼女はそれでも聞きたがった。

一度話したことも、彼女は何度もうなずき、嬉しそうに聞いていた・・・・まるでもう2度と忘れないように自分自身に刻み込むように。

話をしていると、景色は紅く色づいていた。いつの間にか夕方になっていたらしい。

師匠はその景色を一瞥して呟いた。

「じゃあ、最後の修練を始めるかのう。」

ノゾムｓｉｄｅ　ｏｕｔ

シノｓｉｄｅ

ノゾムとだた言葉を交わす。内容はごくありふれたもの。故郷はどこだ。家族はどうだ。好きなものは。

そんなごく普通の会話。今までそんな会話はあまり交わさなかった。教えるのは刀で、語るのも刀。

刀、刀、刀。

そんなことしか教えてこなかったし、それが一番わしらしかった。

だから今、彼が話すごく普通の話がすごく新鮮で、わしの話を聞いて彼がコロコロ表情を変えることが、すごく嬉しい。

こんな風に人と言葉を交わすことなど、もうないと思っていた。

・・・いや、意図的に避けていたのだろう。ノゾムが“恋人に振られた”という事実から無意識に逃げていたように、わしも“家族に裏切られた”という事実から逃げ、人を避け、立ち止まっていたのだ。

・・・つくづく愚か者だ。

これでは弟子の事をとやかく言う資格などないのう・・・

そんな不出来の師を此奴は慕ってくれた。口では何だかんだ言うが、私を信用し、信頼してくれているのはとてもよく感じ取れた。

もし、わしが生まれるのがもう数十年遅かったなら・・・きっと

わしはおぬしと共に生きていきたいと願ったじゃろう。

しかしわしらの間にある絆は恋人ではなく師弟の絆。それが少し残念じゃが、それでも最後におぬしの心に残せるものがある。

わしはそれでええ。それで十分じゃ。おぬしの隣は・・・おぬしと共に歩めるものに譲ろう。

「じゃあ。最後の修練を始めるかの」

シノｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ノゾムｓｉｄｅ

師匠はまるで散歩に行くかのようにその言葉を言った。

「あ、あの師匠。最後って・・・」

「言った通りじゃ。これが、わしのつけてやれる最後の修練じゃよ。」

師匠の様子は変わらない。いつもの飄々とした師匠だ。そんな雰囲気で次に彼女が言った言葉は・・・

「だ、だから!最後ってどういう「最後の修練は・・・わしと本気で殺し合うことじゃ。」・・・え。」

俺は師匠が何を言っているのか理解できなかった。

殺し合う?俺が?師匠と?

「な、なにをいってるんですか!どういうことですか!!」

師匠は庭に立つと鞘に収めた刀を構える。彼女はすでに戦いの準備を終えていた。

「師匠!!答えてくださ「何も言う気はない。それともおぬし、自分を本気で殺そうとする者に一々理由を訪ねる意味はあるのか?」師匠!!!!!」

師匠の目の色が変わり、彼女の身体からは重い覇気を感じ取れる。明らかに本気の師匠だ。

俺はそれでも師匠に問いかける。

「当たり前です!最後ってどういうことですか!!それに殺し合えって・・何考えてるんですか!!!」

「・・・」

彼女は何も言わない。代わりにその行動で示してきた。

師匠の身体が一瞬ぶれたかと思うと、猛烈な殺気が俺に叩きつけられる。

次の瞬間には彼女は既に俺の目の前に迫っていた。抜き打ちの構えから鞘に納められていた刀が俺の首めがけて抜刀される。

俺はそのさっきから逃げるように地面を転がる。師匠の刀は俺の直ぐ上を薙ぐが、そのまま彼女は回し蹴りを放つ。

俺は咄嗟に掲げた右腕でその蹴りを受けるが、気で強化された蹴りはあまりに重く、そのまま吹き飛ばされて木に叩きつけらた。

「クハッツウ。」

痛みに顔を顰めるが、修練で身に染みついた動きですぐに起き上がり、体勢を立て直す。本能的に刀を抜刀、次の攻撃に備える。

「師匠！いったい何がしたいんですか！」

師匠は何も言わず、刀をこちらに向けている。

その眼は“何も語る気はない”と宣言している。

・・・師匠はいつもそうだ。他の修練のときもこちらに質問など

許さず、一方的に宣言して何か言えば倍の修練をやらせるなど理不尽極まりないことを言ってきた。
どうやら闘わないと何も教えてくれないらしい。

でも今回の師匠は明らかにおかしい。
今までの修練でも、模擬戦でも彼女は“死にかねない”事はやっても“殺そう”とはしなかった。
でも今の彼女からは濃密な殺気が俺に突き刺さってくるし、先ほど抜き打ちも狙いは俺の首。明らかに俺を殺しに来ている。

師匠の姿が再びぶれる。そして側面から放たれる殺気。

俺は咄嗟に気術で身体強化をかけて刀を掲げる。掲げた刀は奇跡的に師匠の斬撃を防ぐが、彼女はそのまま連撃を放つ。

袈裟切り、左薙ぎ、右切り上げ、左切り上げ、流れるような無駄のない動きと、精密極まりない斬撃の嵐が撃ち込まれる。

俺はその斬撃を僅かに下がりながら迎撃する。膝、腰、腕、すべてを無駄なく連動させて、師匠の刀を受け流す。

それでもやはり圧倒される。同じ流派の刀術であるが、技量、身体能力、経験、どれも師匠が上だ！

たまらず瞬脚で離脱するが、師匠はすぐさま追いつき、追撃してくる。

互いに高速移動しながらぶつかり合う。

黄昏は去り、周囲を闇が包むなか、満月に照らされた刀の軌跡だけが二人の存在を映していた。

2人の動きは直線的な瞬脚とは違い、互いに曲線を描きながら互いの周囲を纏わりつくように移動している。

気術“瞬脚－曲舞－”

気術“瞬脚”の発展系。膝の動きとそれに伴う重心移動、さらに体幹の動きと肩の動きを全て連動させて、本来直線にか動けない瞬脚に複雑な曲線移動を可能にした技。

言うのは簡単だが、実際は瞬脚の勢いを完全に御しきれるだけの強靭な足腰と、全身の動きを無駄なく連動させる繊細さを要求される。

強靭な足腰がなければ瞬脚の勢いに体勢を崩して地面にたたきつけられるし、全身の動きが連動していなければバランスを崩し、これもまた地面にたたきつけられる。

強靭さと繊細さが要求される、極めて難易度の高い高等技術なのだ。

瞬脚－曲舞－での打ち合いはやはり師匠が上だ。瞬脚－曲舞－は瞬脚の発展系だがその移動速度はやはり使用する者の能力がかかわってくる。

師匠の瞬脚－曲舞－は明らかに俺のそれを上回っていた。俺は徐々に後手に回らざる負えなくなり、遂に移動先に先回りされた師匠

に足を止められてしまう。

「クソ！！」

再び師匠と足を止めて打ち合いになるが状況は先ほどと変わらず圧倒されていた。

しかも師匠の攻撃は刀だけではない。

「くっ！！」

斬撃を捌いた後に師匠が片手で鞘を振り抜いてくる。気術で強化された鞘は人の骨など容易くへし折ってしまう。
いつの間にか刀と鞘の二刀流になった師匠の攻撃は、威力は落ちるものの先ほどよりさらに濃密な攻撃を可能とし、その顎で俺を喰らい尽くさんとする。

彼女の戦い方はこのように刀術だけでなく鞘、さらに体術を織り交ぜた総合戦闘技術であり、これが本来の俺たちの戦い方。

俺も戦い方を鞘による二刀流に変更。さらに激しくなった師匠の攻撃を裁く。
しかし元々の能力、技量差により押される一方となり、そのうち迎撃が間に合わず、鞘による打撃が俺を捉えた

「グアッッ！！」

ズドンッと言う鈍い音とともに鞘を持つ方の二の腕に師匠の鞘が当たる。幸い骨は折れず、鞘は保持できている。
一瞬動きの鈍った俺の隙を逃さず、師匠はもう一方の刀を一閃す

る。
刀での迎撃は間に合わず、やむを得ず体を逸らすことでどうにか躱すが、再び師匠の蹴りがとんできた。
俺は避け切れないと判断し、後ろに跳び、彼女の蹴りの威力を殺す。
後ろに跳んだことで大きく飛ばされ、間合いが開く。

まるで以前の打ち合いの焼き直しの様だが実際は違う。俺は飛ばされながら痛む腕に鞭を打ち、刀を鞘に納める。
地面にたたきつけられる瞬間、受け身を取り、後方に跳ねるようにして起き上がりながら刀に気を送り、極圧縮。

生半可な技では師匠には通じない。気量の都合上、使える回数は限られるが自分の最も信頼できる技に望みをかける！

気術“幻無”

極圧縮された気の刃が高速で飛翔。瞬きするまもなく師匠に着弾する・・・そのはずだったが、現実はその上を行った。

「なっ！！」

突然俺と師匠のちょうど中間地点で炸裂音がした。極圧縮された気が拡散し、周囲に散っていく。

師匠を見ると同じように抜刀術の体勢で刀を振り抜いていた。信じられない事態に呆然となる。そんな隙を師匠が逃すハスはなかった。

師匠が瞬脚でこちらに吶喊してくる。あわてて迎撃しようとするが明らかに間に合わない。咄嗟に鞘を刀の軌跡に入れるが、彼女はその鞘を無視して刀を振り抜いた。

気術“幻無―回帰―”

先ほどの抜き打ちとは逆の軌道を描き、俺の身体を袈裟懸けに切り裂いた。

第1章終幕・前編（後書き）

第1章の終幕・前編いかかでしたか。
尺の都合で後編はまた後日投稿します。

第1章終幕・後編（前書き）

第1章終幕後篇です。
とりあえず第1章はこの話で終わりです。
では、どうぞ！

第1章終幕・後編

ノゾムｓｉｄｅ

切り裂かれた傷口から血が噴き出す。

「あっ。ぐう！」

あまりの痛みと血が抜けていく喪失感で足から力が抜け、地面に膝をつく。

彼女がやったことは至極単純。俺が放った幻無を同じ幻無で相殺したのだ。

だが・・・そんなことが可能なのか？

幻無はその特性上、視認することは極めて困難だ。

同じ幻無で迎撃するには俺の放った幻無と同じ軌道を寸分の狂いもなく正確に放たなくてはならない。

そんな針に糸を通すよりも遥かに困難なことを師匠は難なくやってのけたのだ。

俺師匠の実力差は明らかだ。技量、能力、経験どれも彼女が上、俺が勝てる要素はひとつもない。

“勝てない”そんな思考にとらわれた俺に師匠の言葉が響いた。

「ノゾム、能力抑圧を解放しろ。」

（えっ）

「わかっとるはずだ。わしに勝つには能力抑圧を解放するしかない。」

（そうだ、あれを使えば師匠に勝てるかもしれない）

確かに師匠に勝つにはそれしかない。それが自分の持つ唯一の可能性だ・・・だけど。

いまだあの夢がよぎる。夢の湖の中にいるティアマットとその時に感じた一抹の不安。夢の中で見た奴の眼には、確かに意思があり、生きていた。

精霊種としての特性なのだろう。おそらく肉体は死んでも、魂はそのままなのだ。

そして能力抑圧は偶然にも奴の力を抑え、その魂までも押さえ込んでいるのではないか？

（このまま能力抑圧を解放したら奴まで解放される！）

「・・・」

・・・決断できない。自分には出来ない。自分を殺す気でかかってくる師匠とそれに勝つにはティアマットの解放が必要。そうしたらどちらにしても自分は死ぬ！

「まだ迷っておるのか。」

師匠が再び切りかかってくる。咄嗟に防ぐが先ほど切られた傷のせいで明らかに動きは鈍い。

斬撃だけはどうにか防ぐが師匠は容赦なく鞘による打撃と蹴撃を打ち込む。

「イッ、クッ、グアアア！」

痛みと失血で意識は朦朧となる。

“ここで死ぬのか”

相手が師匠だからだろうか、今まで戦いの時に溢れていた強烈な“生きたい”という思いは湧き上がらず、“師匠ならいいか”とあきらめの思考が俺を支配する。

ふと師匠を見ると彼女の顔は苦悶に歪んでいた。

“どうしてそんな顔をしているんだろう”

そんな疑問が頭に思い浮かんだ時、今にも泣きそうな顔で彼女は告げた。

「ノゾム、わしはもうすぐ死ぬ。長くないんじゃよ。」

ノゾムside　out

シノside

すまないと思いながらもノゾムに攻撃を打ちこむ。

いきなりこんな事をしてすまない。こんなに痛めつけてすまない。

でもこれで最後だから、最後のわがままだから。

そんな思いでふと彼を見る。

彼の眼には、これまでの危機に陥った時の彼のように“生きる”という強烈な意思はなく。これから訪れる死を受け入れた眼をしていた。

違う！　そうじゃない！　私は彼に伝えたい事があるから、受け入れてほしい事があるから・・・・そんな目をしてほしいのではない！！

伝わらない自分の思いに泣きそうになる。

彼に伝えないと・・伝えたい事、受け入れてほしい事があると。

そのために・・・

「ノゾム、わしはもうすぐ死ぬ。長くないんじゃよ。」

シノside out

ノゾムside

「ノゾム、わしはもうすぐ死ぬ。長くないんじゃよ。」

その言葉に思考が止まる。死ぬ？　師匠が？　どうして？

「睡死病じゃよ。徐々に気が体から抜けていき、最後には気を使い果たして死ぬ病じゃ。」

「なっ！　それならすぐに治療を「治療法は特定され取らん。それにわしの気は持って一晩じゃ。」そんな・・・」

「もう少し体の気を制御すればもう少し持ったのだがのう。」

「じゃあ！どうしてそうしないんですか！！少しでも時間があれば何かできるかもしれないで「わしはのう・・・」師匠！！！！」

こちらの問いかけを無視して自分の話を進める師匠。次に発せられた言葉は俺の問いかけを完全に封じた。

「家族に裏切られてここに来たのじゃ・・・・」

「えっ・・」

「実の姉に嵌められ、両親から見捨てられ、周りから唾を吐きかけられて、この大陸に逃げてきたのじゃ。」

それから師匠が語ったことは、今まで聞いたことのなかった師匠の身の上話。師匠の家族の話は聞いたことはあったけど、そんな事があったなんて師匠は全然話さなかったし、全く感じさせなかった。師匠が家族の事を話したときは嬉しそうで、とても家族が大好きだったことが雰囲気で分かったから。

「わしとおぬし、驚くほど似ておる。互いに裏切られ、周りから嘲笑されて逃げ出した。」

そのとおりだ。俺はリサに振られたことをから鍛錬に逃げ、彼女は実際に国から逃げ出した。

「わしはもう死んでも構わなかった。じゃからこそ、こんなところに隠居したんじゃ。」

師匠は自分の思いの丈をぶちまける。

「わしには何もなくなった。じゃが、おぬしと出会った。初めはわし自身の分身を見ているようで苛立ったが、おぬしはわしと違い、生きることをあきらめなかった。それにわしは自分にはない何かを感じのじゃ。」

「ノゾム、これがわしの最後のわがままじゃ・・・。・・・逃げ続けたわしが最後に残したいことが、おぬしだからこそ伝えたい事があるから」

彼女はそう言って泣きそうな顔で俺に懇願した。

「どうか、わたくしの最後の願い。受け入れてはもらえませんか・・・」

・・・師匠の言葉で目が覚める。

彼女は自分の最後を目の前にして自分の道をとっくに決めていみたいだ。

・・・ここで師匠に言葉を掛けて、生きるよう説得することは簡単だ。でもそれは彼女の意思を捻じ曲げてしまうことなんじゃないか？　彼女は自分の最後の時間を削ってでも伝えたことがあるといったのだから。

・・・・・・認めよう、俺はずっと逃げてきた。あの学園で自分を取り巻くものの全てから。

逃げて、逃げて、“逃げた”という事実からも逃げて・・・

でも・・・

師匠の顔を見るとその顔は涙があふれそうで、まるで迷子のようだった。

ここで師匠の願いから逃げたら二度と彼女とは向き合えない。何より師匠にあんな顔させたくない！！！

自らを縛る鎖に手をかける。能力抑圧を解除すれば自分はあの漆黒の龍に食われるかもしれない。

でも今ここで逃げたら一生後悔する！！

俺は鎖を引き千切り、初めて本当の自分を解放した。

次の瞬間。俺の視界は暗転した。

俺は夢で見た湖の湖畔にいた。目の前に黒い巨躯が佇んでいる。

“滅龍王ティアマット”

奴は俺を見ると、前足を振り上げて叩き潰しに来た。

咄嗟に後ろに跳び、着地と同時に地面に伏せて衝撃波をやり過ごす。しかし次の瞬間、横薙ぎに薙ぎ払われた奴の尾が俺の目の前に迫っていた。

明らかに前回の戦いより速い！！！

躱す間もなく尾が直撃する。

「げはあっ！！！」

空中に投げ飛ばされて全身の骨が折れ、激痛で意識が飛ぶ。

碌に受け身も取れずに地面に叩きつけられる衝撃で意識が戻るが、脳が痛みの処理能力を超えたのか何も感じ取れない。

全身があまりに傷つき、まだ体があるのかさえ分からないが、全身の筋肉を酷使してどうにか立ち上がる。奴は口をあけ、ブレスをこちらに放とうとしている。以前とは違い始めからこちらを殺しに来ている！

「アアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

雄叫びをあげてティアマットに向かって突っ込む！

奴と自分の能力差を考えれば時間はかけられない。何より・・・

「お前なんかお呼びじゃないんだよ！　俺の相手はお前じゃない！！！！！」

今の俺にはお前なんか眼中にない！！！！！！！

ブレスが放たれる。眼の前に迫る巨炎を、身を捻って躱そうとするが、ぼろぼろの身体では躱しきれるはずもなく、炎が触れた右半身が消滅する。

それでもかまわず左足で跳躍。後ろで響く爆音と衝撃波を背に受けながらティアマットに突っ込むが、そこには開かれた奴の口があった。

俺が飛び込むと即座に口が閉じられ、奴の牙が俺を引き裂く。

下半身が断ち切られ、頭を半分抉り取られる。全身を貫かれて、もはや俺の身体は血みどろの肉塊に成り果てた。

だが、精神世界ゆえか、もはや死んでいるはずの怪我でも俺の意識はあった。それが蟷螂のように儚くても。

全身をグチャグチャにされながらそれでも前を見ると、血にまみれた視界の中に光る。

その光は5色に彩られ、小さいながら絶大な力を感じとれた。おそらくこれが奴の力。

その光に手を伸ばし触れようする。既に体の下半身は喪失し、内臓が垂れ流しになっている。

右腕は喪失し、左腕も牙で抉られ、半ば千切れている。意識はほぼ無く、口からは呻き声しか出ない。

それでも手を伸ばす。指がちぎれた手が光に触れると光があふれ、俺の視界は再び暗転した。

気が付くと元の場所に戻っていた。

「グゥ！！！」

全身から力があふれる。あまりに大きいその力は俺の精神をガリ

ガリ削っていく。
時間はない。長引けば俺がこの力に食われるか、最悪制御できずに死ぬ！
師匠を見ると彼女は嬉しそうにこちらを見ている。
刀を構える。師匠に切られた傷からは血がいまだ流れ出るが、構いやしない。

「行きます！！！」

「こい！！馬鹿弟子！！！」

これまで以上の気を放出し、刀を構える師匠。
師匠のすべてを受け止める。その意思を固め、俺は再び師匠と対峙した。

ノゾムｓｉｄｅ　ｏｕｔ

２人は再び瞬脚ー曲舞ーを発動し、ぶつかり合う。複雑な曲線を闇夜に描き、月の光に剣閃をきらめかせる。

その速さはもはや超一流の戦士たちですら目では追えない領域に到達していた。

互いに絡み付きあうように打ち合うその姿は、先ほどと変わらないが、その優劣は明らかに違っていた。

ノゾムの放つ一撃はシノの腕を痺れさせ、シノの攻撃はノゾムに防がれ、逆に弾き飛ばされそうになる。

技量こそシノに分があるものの、抑圧を解放したことで、自らを縛るものがなくなったノゾムの身体能力は明らかに彼女を上回っていた。

徐々に劣勢に立たされていくシノ。その口から思わず愚痴が出る。

「クッ！　もう少しおなごに優しくせんか！　この馬鹿弟子！！」

「何言ってるんですか！　少なくとも自分の前に優しくしなければいけないか弱い女の子はいません！！　いい加減自分の歳考えてください！！！」

「何言っとるか！　おなごは何歳になってもおなごじゃ！！　女心のわからぬ奴め、そんなだから恋人に見捨てられるのじゃ、このヘタレ！！！」

「なっ！　なんてこというんですか！！　こんなところに引き籠ってた引き籠りに言われたくありませんよ！！　ヘタレ具合ならそっちも大概でしょう！　この世間知らず！！！」

「いっ、言うに事欠いてなんということを！　師匠に対してなんという言い草じゃ！！　そこえなおれ！　その根性叩きなおしてくれるわ！！！」

「上等だ！　いい加減あんたの癇癪には辟易していたんだ！　ちょっとした冗談でSランクの技をぶち込みやがって！！　何回死にかけたと思ってるんだ！！！」

「ちゃんと死なないように手加減したわ！　三途の川からギリギリ帰れるくらいにな！！」

「そういう問題じゃねーーーーー！　なんでツッコミだけで死にかけなきゃならないんだ！！！！」

「いちいち細かいこと気にするな！　帰ってこれたのじゃからいいじゃろう！！」

「よくないわーーーーーーー！　」

お互い碌でもないことを口走りながら戦う。極めて高度な技の応酬と極めてくだらない舌戦である。

瞬脚ー曲舞ーでの高速戦は身体能力で上回るノゾムに分があり、このままではまずいと思ったのか、シノが手を変えてくる。

「ちぃい！　このままでは坊主を粛清できん！！」

「ちょ！　今粛清って言った！！　殺す気かこのばあさん！！！」

「当たり前じゃ！！　初めにそう言ったろうが！！　乙女の心の傷を抉った罪、地獄で反省するがよいわ！」

シノが両手を腰だめにして気を圧縮する。彼女が両手を突き出すと圧縮した気が解放された。

気術　“震砲”

圧縮した気を一方向に開放して、相手を吹き飛ばす気術である。

震砲で吹き飛ばされたノゾムにシノは追撃をかける。

「くたばれ！乙女の敵！！！」

乙女とは程遠い発言でシノは準備していた技を放つ。

気術“幻無”。

極圧縮された気が放たれるが、既にノゾムは迎撃の体勢を整えていた。

「それはこっちのセリフだ詐欺師！！　年齢詐称と暴力は犯罪です！！！」

放たれるのは同じ気術“幻無”。２つの技は互いの中間で激突し、互いに相殺し合う。

ノゾムが先ほどシノが行ったように、幻無を幻無で相殺を可能としたのは極限の集中力。

かつてティアマットと戦い、死に瀕したとき、彼は周りの時間が遅く見えるほどの集中力を発揮した。この極限の集中力のおかげでシノという超一流の剣士の剣閃を完全に見切れたのだ。

周囲に舞い散った気の残滓を２人は突っ切り、次の技を繋ぐ。

「師匠の偉大さを思い知れ！！！」

「下剋上だ！！　天然犯罪者！！！」

気術“幻無一回帰一”

極圧縮された気を帯びた返しの刃が激突し、周囲に再び気と火花の花を咲かせる。

2人はさらに次の技へ繋ぐ。

返しの刃の勢いを利用し体を回転させる。刀を納刀しつつ鞘尻を相手に向け、納刀と同時に叩きつける。

気術“破振打ち”

相手の体内に気と衝撃波を同時に打ち込み、相手の体内を破壊する内部破壊技。まともに当てれば内臓をグチャグチャにされてしまうだろう。

ドウンという腹に響く音とともに互いの技が打ち消される。

技がぶつかり合った時の衝撃で互いの間合いがわずかに離れるが、そのまま次の技へと繋ぐ。

2人は身を翻しながら、刀を持っていない方の手に気を送り込む。

その量は今までの気術とは比較にならないほど、膨大な気が込められていた。

多量の気を送り込んだ拳を互いに地面に叩きつける。すると2人

の間の中央の地面が爆発し、光の柱が噴出した。

気術“滅光衝”

地面に打ち込んだ気を敵の足元で解放し、相手を空中に打ち上げ、気による光の奔流で滅する気術。

彼らの持つ技の中では最大の効果範囲と高い殲滅力を持っている。

2人の滅光衝は地面の中を突き進みそのまま激突。そのまま地上へ押し出されたのだ。

「まだまだじゃ！！！」

「あたりまえだ！！！」

さらに技を繋げる2人。互いに納刀状態のまま相手に突っ込み、四肢を使い体術戦を繰り広げる。

拳、脚、肘、身体のあらゆる部位を使い、まるで舞うように打撃を打ち込む。その型は全くの瓜二つ。

やがて2人の周囲に変化が訪れる。光の粒が現れ、それが螺旋を描きながら2人に集まり始めたのだ。

実は彼らはすでにある技を発動していた。

儀式体術　“輪廻回天”

儀式魔法と呼ばれる魔法がある。その名の通り、儀式を行い外界の魔素に干渉することで発動する魔法だ。

ノルン・アルテイナが魔法の授業で言ったように儀式魔法の起源は、神々や精霊に祈りや供物を奉納する神事である。

もともと“舞”はその神事の際に同じように奉納されていたものだ。

これを利用し、“舞”と“武”を融合して作られたのが儀式体術なのだ。

ある型で相手を攻撃しながらそれを“舞”として奉納し、儀式を成立させ、周囲の魔素に干渉。儀式魔法を展開する。

この“輪廻回天”は周囲の魔素を吸収し、身体強化を重ね掛けしていくもので。舞えば舞うほど威力が跳ね上がっていくのだ。

ただ儀式体術は決まった型にどうしても縛られるため、型を見切られると途端に劣勢になってしまう可能性がある。

身体強化を重ね掛けされた2人の激突は、やがて衝撃波で周囲の

木々を震えさせるまでになる。

２人の舞いは途切れることなく続き、周囲にはその舞いを称えるように魔素の光が集っていった。

シノｓｉｄｅ

急激に気が抜けていき、目の前が暗くなっていく。

桁外れに強くなった弟子に対抗するにはすべての気と魔力を使い、すべての技を駆使して限界を振り切らなければならなかった。

それでもどうにか互角が手一杯。

限界を超えた気の喪失は睡死病を一気に進行させた。気の回復量と喪失量は逆転し、もう回復することはない。

それは自分の死が確定したこと。

（まあ・・・いいかの）

そんな事実を他人事のように考えながら自分の最後の愛弟子をみる。

・・・強くなった。本当にこの子は強くなった。楔を解き放った時のこの子に勝てるのはもはや大陸でも数人だろう。

その者達ですら場合によっては打倒してしまうかもしれない。

この子は今自分の意思で自分の内に秘めた巨大な力と向き合った。

こんな小さな子など容易く押しつぶしてしまうほどの強大な力。普通の人間なら恐怖のあまり発狂するだろう。もしくはその力に呑まれるか。

こんな婆の最後の頼みのためにその力と向き合い、戦ってくれた。

これが最後になるけれど・・・・・ありがとう。ノゾム。

シノｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ノゾムｓｉｄｅ

ともすれば破裂してしまいそうな力に歯を喰いしばって耐える。もう長くは解放していられない。理性は削られ、強すぎる力に身体はガタガタだ。

能力はこちらが圧倒しているのに攻めきれない。繰り返し打ち込む攻撃は均衡し、ただ時間だけが流れる。

周囲の魔素の動きはさらに加速し、舞いは終局に近づく。

近づく終わりを感じて、師匠と出会ってからの今までのことが頭をよぎる。

森での偶然の出会い。

地獄のような鍛錬。

自分が目を逸らしていたことを突き付けてくれたこと

「おかえり」と言ってくれたこと。

師匠のいるところは間違いなく“帰れる場所”だった。

それはもうすぐ無くなる。

とても悲しくて・・・胸の内は悲しみで張り裂けそうだが・・・

師匠の最後の頼みなのだ！

無様な姿は見せられない。

もうすぐ最後になってしまいますが・・・・・・ありがとうございました。師匠。

ノゾムｓｉｄｅ　ｏｕｔ

舞はついに終わりを迎えた。限界まで強化された2人の蹴撃が激突する。

衝撃波で周囲の地面は捲れ上がり、吹き飛ばされる。木々は大きくしなり、ギシギシと悲鳴を上げていた。

激突した時の衝撃を再利用して2人は独楽の様に身体を回転させる。

それと同時に納刀したままの鞘に全力で気を送り込み、限界まで圧縮する。

気術“幻無ー閃ー”

ただ己の最速の抜刀術を放つだけの技。ただ己の想いを込めただけの技。

2人の思いを乗せた刀が交差した。

森に静寂が戻った。

ノゾムの刀は柄しか残されていない。

放たれた刀は2人の中心で激突し、その瞬間。ノゾムの刀が砕け散っていた。

直後、シノはその場に崩れ落ちる。

「師匠！！！」

ノゾムはシノに駆け寄り彼女を抱きあげるが、彼女の顔は青白く、生気が全くなかった。

「・・・ノゾム。強くなったねえ・・・もう刀で教えられることはなさそうだ・・・」

「師匠・・・」

医者としての知識のないノゾムにも分かった。彼女はもうここで死ぬ。

「嬉しかったよ。こんな婆の最後の頼みを受け入れてくれて。・・・わしの想いを汲んでくれて。」

目頭が熱くなる。もう避けようのない別れを前にしてノゾムは涙を抑えきれなくなっていた。

「ノゾムこれだけは覚えといておくれ。」

「逃げてもええ。立ち止まってもええ。でも“逃げたこと、立ち止まっている”という事実から目を逸らさないでおくれ。もしそれを忘れればわしの様に進めなくなってしまう。」

もはや目も見ないのだろう、彼女の視線は空中を泳ぎ、身体はどんどん冷たくなっていく。

「たとえ逃げても、たとえ立ち止まっても、それを忘れなければ、どんな形にしろ、いつか前へ進めるはずじゃから・・・」

「・・・・・・ッ、はい。師匠・・・」

彼女はノゾムの言葉を聞くと安心したように笑みをこぼした。

「よかった・・・これで満足じゃ。」

彼女は月を見上げる。静かな、見守ってくれるようなやさしい月だった。

「ノゾム。・・・疲れたから少し・・・寝るわい。・・・いつかまたの。」

「・・・はい師匠。・・・おやすみなさい。」

彼女は満足し、ゆっくりと目を閉じ、深い、深い眠りに就いた。

もう覚めることのない深い眠りへ。

後に残ったのは、声を押し殺してすすり泣く誰かの声だけだった。

あれから1週間。ノゾムは3学年に進級していた。

進級試験は相も変わらずギリギリだったが・・・

ノゾムは今の自分を思う。

今まだ自分は立ち止まっている。リサのこと、学園のこと。俺自身のこと。

また逃げてしまうかもしれない。立ち止まったままかもしれない。

でも、その事実から目をそむけるのはもう終わりだと。

師の教えと新たな決意の萌芽を胸に、彼はソルミナティ学園の門へ歩みだした。

第1章終幕・後編（後書き）

いかかでしたか第1章のテーマは「逃避の自覚」です。
逃げつつげていたノゾムがそのことに気づくまでが、この章のメインテーマでした。
とりあえず第2章の構成を考えていたのですが、まだまだ足りない要素があるのでもう少し時間がかかると思います。
こんな駄文に付き合っていただき、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7408y/

心の中の”こころ”

2011年12月1日00時53分発行